

濟定檢省部文

375.9  
Ta11  
資料室

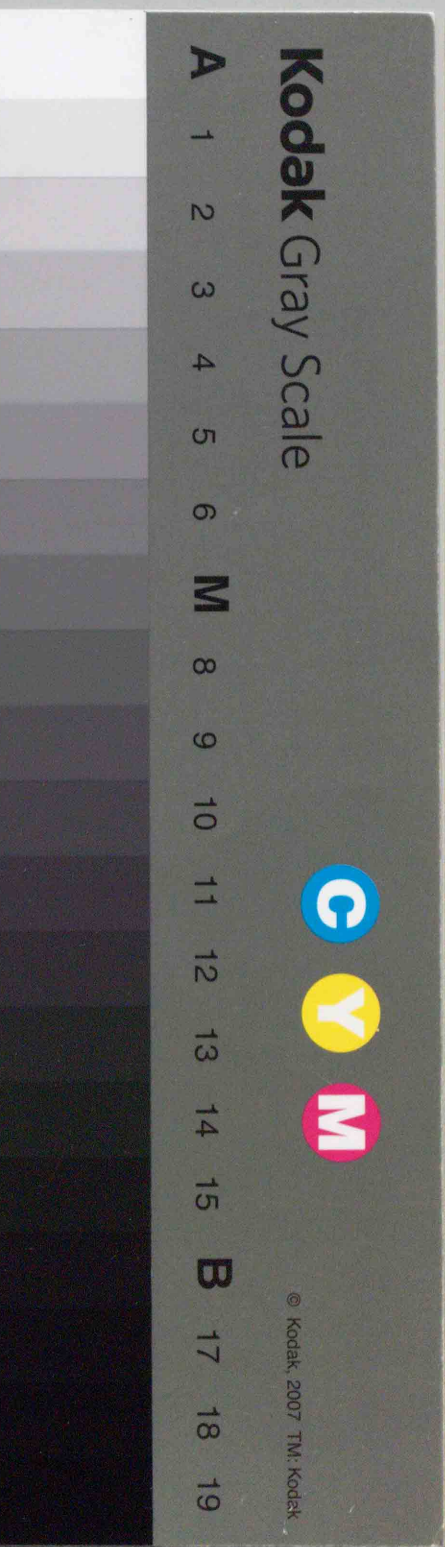
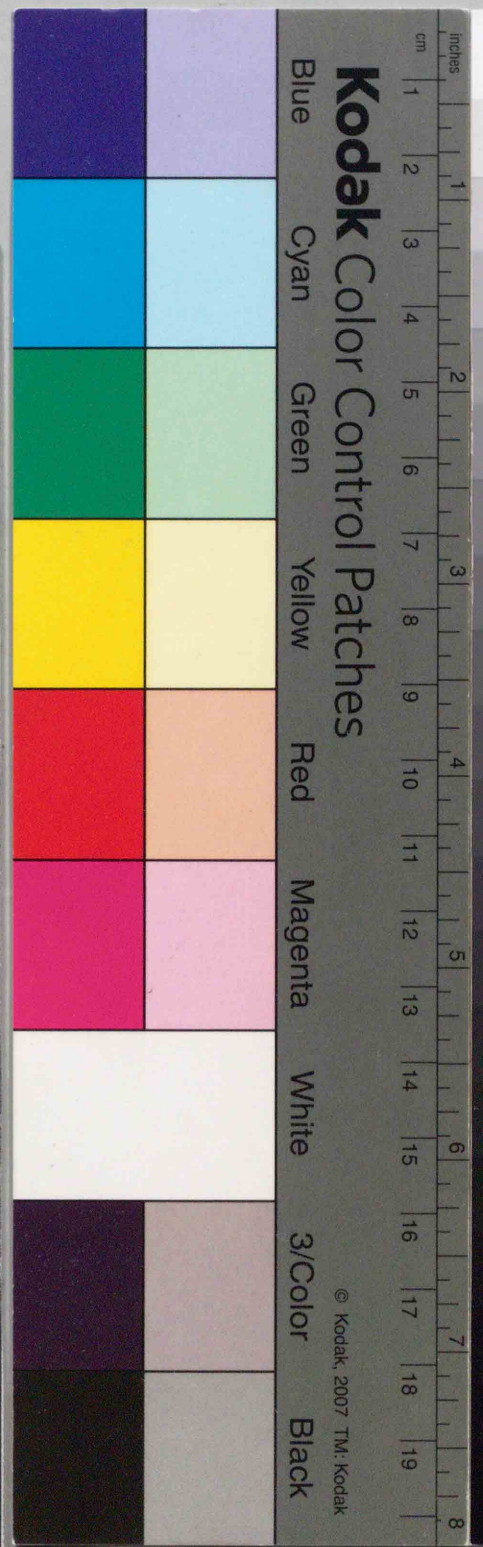
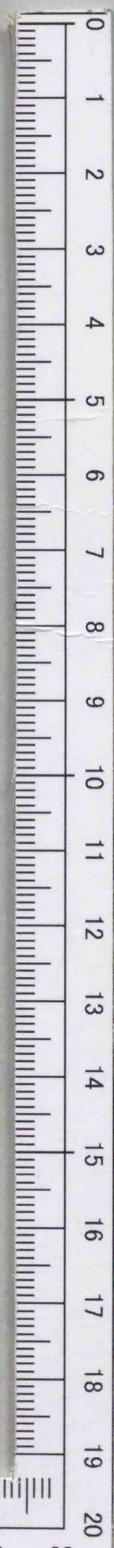


昭和國文讀本卷九

文學博士高堅辰之編

東京寶文館藏版

教科  
41-  
2000



41649

教科書文庫

4
810
41-1929
20000 44032



昭和四年一月十五日  
文部省檢定濟

教科書文庫  
4  
810  
41-1929  
2000044032

資料室

3759  
Tail

文学博士高堅辰之編

昭和國文讀本 卷九

東京寶文館藏版

広島大学図書  
2000044032  




# 昭和國文讀本

中學校用 卷九

## 目次

- 一 文學と人生……………藤井健次郎……………一
- 二 雄辯と文學……………芳賀矢一……………四
- 三 藥師寺の花會式……………高野辰之……………三
- 四 平安朝時代の郊外……………佐々政一……………六
- 五 柳綠花紅……………詩……………藤岡作太郎……………元
- 六 平安朝時代の文學……………高野辰之……………翌
- 七 菅公の左遷……………文語文……………(大) 鏡……………空

目次

一

八	大原御幸……………	文語文……………	(平家物語)……………	三
九	ワイマールより……………	書翰文……………	藤代禎輔……………	六
一〇	藝術の表現……………	……………	厨川白村……………	六
一一	狩野芳崖……………	文語文……………	岡倉覺三……………	六
一二	汽車に乗りて……………	詩……………	上田敏……………	〇六
一三	世界の四聖……………	文語文……………	高山樗牛……………	〇九
一四	芳宜園大人を祭る……………	文語文……………	村田春海……………	三四
一五	隅田川……………	謡曲……………	……………	三六
一六	武 悪……………	狂言……………	……………	三九
一七	自主的精神の要求……………	……………	深作安文……………	五

一八	長柄隄の訣別……………	脚本……………	坪内逍遙……………	二五
----	-------------	---------	-----------	----

目次終



昭和國文讀本 中學校用 卷九

一 文學と人生

藤井健次郎

藤井健次郎  
文學博士  
京都帝國大  
學教授

諸君、文學とは何であるか。文學は人生の縮圖である。人生と云ふ海の様子に廣いものの上に現れた百般の姿を鏡の如き狭いものの上へさながらに描寫したものが文學である。さらば人生とは何であるか。よく世間では、禍福は糾へる繩、などと言ふが、人の運命は啻に糾へる繩の如きのみではない。彼の大空に横たはれる雲のやうに、あると見れば消え、消えたかと思れば涌き、海かと思れば山、龍かと思れば虎、乍ちにして淡く、乍ちにして濃く、變幻出沒殆ど端倪すべからざるものである。只此の一片の雲で

さへ少からず吾等の感興を惹くものを、それよりも更に奇妙で、更に變化ある此の人生の波瀾動搖が、どうして吾等の感興を惹き起さずにあらう。變幻出沒極りないのが人生の姿である。これが人生であるかと思れば忽ち其の姿をかへ、それが真相かと思れば又忽ち消えて跡を晦ます。凡手は容易にこれを捉へることが出來ない。しかも來ず、凡眼はなかく、其の真相を認めることが出來ない。しかも捉へることがむづかしかければむづかしいほど、認めにくければ認めにくいほど、これを捉へたいと思ふのは、誰しもの人情である。しかるに詩人といふものは、其の鋭敏な眼と靈妙な腕とを以て、その認め難い人生の真相をしつかりと捉へて來て、それを世人の前に示すのである。これが文學である。そこで世人は堪らない。自分の熱望の目的物が眼前に現れるから、人の視線はこ

れに吸ひつけられ、觀ても觀飽く事を知らないのである。

私は文學は人生の縮圖であると云ふ。その大體の意味は前に言つた通りであるが、猶茲に一つの疑が残つてゐる。それは外でもない。その縮圖とはどういふ意味であるかといふことである。

雅邦

姓は橋本

明治時代の

大畫家

明治四十一年

年歿

長沙

支那湖南省

の首都

洞庭湖に注

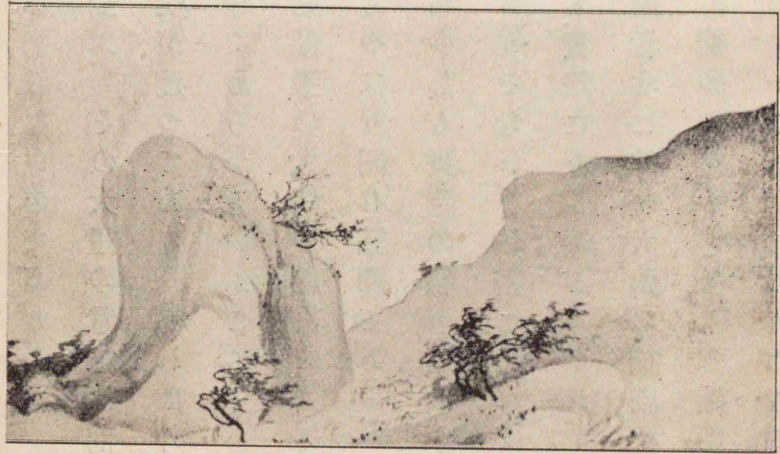
ぐ湘江の沿

岸にある

また長沙あたりで賣つてゐる寫眞もやはり同じ縮圖である。むしろ寫眞の方は實際の通り一木一石少しも實際の物と違はず寫されてゐるが、雅邦の描いたものはさうでない。精密に見れば、實際に生えてゐない木が生えてゐたり、實際にある巖が省かれてゐたりするであらう。しかしながら、兩者共に彼の大觀の縮圖たるに於ては同一である。文學は人生の縮圖であると云ふ。縮圖は彼の繪畫的縮圖の意か、寫眞的縮圖の意か、これが残つてゐる問題

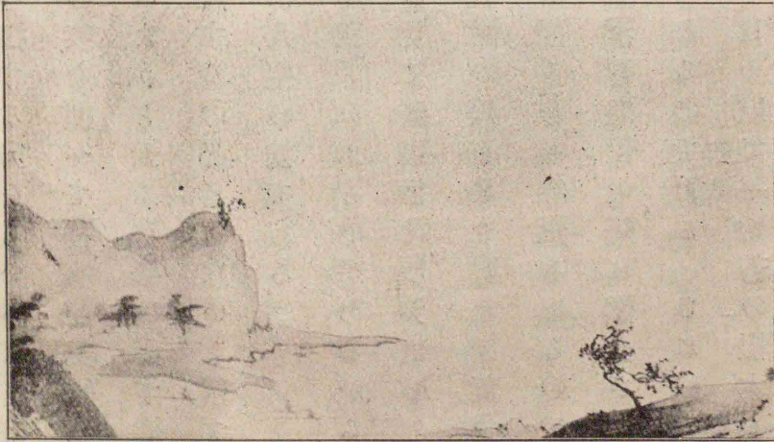
である。

此の問題は一刀兩斷に答へる事が出来る。凡そ文學ともあらう程のものは必ず繪畫的の縮圖であり、又あるべきものたることは疑ないと思ふ。なるほど唯縮圖といふ點より見たならば、寫眞の方がはるかに精密な縮圖であらう。しかし今少し他の點から考へれば、さうではないのである。凡そ物には要といふべき點がある。其の要を捉へさへすれば、其の他はこれをあぐる必



橋本雅邦筆

要もなく、否むしろ擧げない方がよいのである。實際の物には穢い所もあり、醜い處もある。また不完全な處もある。必要の點以上に此等のものをも残らず擧げるときには却つて吾等の感興を害ひ、吾等の想像を破つて、彼の湖邊の美を發揮しようとした折角の努力も失敗に終るのである。されば唯湖邊の美觀の肝要な場所をば極めて精采あるやうに描いて、其の他はすべて觀者の想像に任せる方がその美觀を眞



洞庭湖 (雅邦大觀)

に發揮する所以である。故に美を發揮する方からいへば、繪畫的縮圖である。そこで此の人生百般の姿を捉へて吾等が美的感興の對象となし、美的趣味を満足せしめようと云ふ文學は、必ず繪畫的縮圖たり又たるべき事は殆ど絮説するの必要もないと信ずる。諸君、文學とは何であるか。文學は人生の救である。

凡そ吾等に苦しみ悩みのあるのは「我」といふものがあるからである。「我」あるが故に空しき望を起し、限なき欲を逞しうせんとするのである。「我」あるが故に限なき名聞の奴となり、限なき黄金の僕となるのである。「我」あればこそ憎悪もあり、怨恨もあるのである。名聞の奴となり、黄金の僕となり、憎悪怨恨の焰に燃やされる。ばこそ此の世に苦しみといふものはあるのである。さればこそ菩提樹下に大悟徹底せられた大聖も「我」を以て一切苦の根本とな

大聖  
釋迦を指す

されたのである。

若し吾等にして、我執を離れ、妄見を脱するを得たならば、吾等の意は如何に安らかに、吾等の情は如何に爽かであらう。而して吾等をして此の我執を離れ、妄見を脱せしむる所の易行道は何であるか。それは文學に外ならぬのである。吾等が美しい詩や歌を吟詠し、戯曲小説を閱讀する時には、全く一種の別天地に移つて一切の我執妄見は茲に全く消滅し、讀みゆく己れ、讀まるゝ文學、一つに融けて差別もなくなり、唯何とはなしに怡悦満足の思をするものである。しかもこれは童に一時の救のみでなく、永く吾等の生涯に影響を及すものである。もとより獨り文學と謂はず、其の他の藝術も、皆吾等を靈化する力をもつてゐるには相違ない。併しながら音楽なり、繪畫なりは、割合に専門的技術的要素が多く何人



でも其の力に繼つて救済を得るといふわけにはいかない。然るに文學にはその要素が少い。其の文字と文章とを解し得る人ならば、誰でも多少の救を受けることが出来る。是私が文學は解脱の易行道であるといふ所以である。

凡そ吾等人間を救済するものが三つある。第一は只今述べたところの文學の力で、第二は道德の力、第三は宗教の力である。文學は感情によつて直觀的に救済の任務を果さうとし、道德は意志によつて漸進的に救済しようとし、宗教は其の中間に立つて、半面は情により半面は意志によつて救済せんとするものである。此の三者は此の如く分け登る麓の路に於てこそ違へ、つまりは同じ高嶺の月を見んとするものである。かやうに考へれば、そのいづれの道によつて救済を求むるも其の人々の自由であつて、必ずし

分け登る…  
分け登る麓  
の道は多け  
れど同じ高  
嶺の月を見  
るかな（古  
歌）

も己れに同じきものに黨して異なるものを伐つの必要がないことは明らかである。しかるに世人は此の事を忘れて、所謂文藝派の人々と所謂道學派の人々と相闘ぐがごとき愚を演じてゐる。併し斯くいへば、或は、唯文學のみにより、もしくは道德のみによつて果して全き人格の救済が得られようか。と問ふ者があるであらう。私は必ず之に對して、可能である。と答へる。眞に美なるものは又必ず善を兼ね、眞に善なるものは又必ず美を含んでゐるものである。善を兼ねざる美なく、美を含まざる善はない。されば眞に美なる文學によつて救済せられるものは人格全體の救済であり、眞に善なる法則によつて救済せられるものはやはり人格全體の救済であると思ふ。

諸君、文學とは何であるか。文學とは人生の力である。

祖元  
鎌倉圓覺寺  
開祖

天地に大誓願止鐘 神妙なる  
不二藏鏡 普千秋日大願水  
洋、環い洲發爲萬年櫻衆芳  
粧与倚、津有百鍊鐵、鋭利、刺整  
蓋臣以起、皇、夫盡好仇 神妙  
孰、臨、振、女、有、天、皇、風、冷、  
合、明、德、作、大、陽、不、世、言、隆、正  
氣、時、吐、光、乃、參、大、連、謙、保、推、尊、  
乃、助、明、主、斷、獄、焚、伽、藍、中、即  
常用之、宗、社、監、石、步、清、丸、常用  
、妖、僧、肝、膽、寒、勿、押、龍、口、劍、虜、使  
頭、足、今、勿、起、西、州、颯、踏、清、鐵、妖  
氣、志、質、月、明、夜、陽、為、鳳、輦、地、若  
野、戰、耐、日、又、代、帝、子、走、或、拔、鎌  
倉、座、履、核、心、慎、或、伴、櫻、井、驛  
邊、訓、何、懸、熟、或、守、伏、見、城、一、身  
苗、萬、軍、武、狗、天、同、山、出、回、不、忘  
天、升、年、二、百、載、斯、等、筆、仲、筆、面

一絶  
乾坤無地、  
卓孤節、喜  
得大法亦  
空珍重大元  
三尺劍電光  
影裡斬春  
風、  
東湖  
藤田東湖

筆 湖 東 田 藤

將に虜酋の及の下に非業の最期  
を遂げようとした禪僧祖元が纔か  
に生命を全うするを得たのは果し  
て何の力によるか。彼が死に臨ん  
で泰然として吟詠した一絶の力で  
はないか。幾多幕末の志士をして  
感奮興起せしめた東湖の正氣歌は  
今日猶凛として生氣あり、眞に懦夫  
をして起たしめるの慨があるでは  
ないか。天下の婦女子をして若し  
將來嫁する時があるならば、原田勇  
のやうな夫は持つまい、氣心も知れ

十三夜  
樋口一葉作

其得屈生四十七人乃去人離亡  
羨望未嘗浪長在天、故有、  
鼻、倫、孰、能、扶、持、卓、立、  
結、誠、尊、皇、宮、志、敬、事、天、神、  
脩、文、兼、奮、武、誓、於、清、湖、塵、一、朝、  
天、步、形、却、天、身、先、湊、缺、  
罪、戾、及、如、王、困、青、蒿、天、寬、  
向、誰、陳、孤、子、遠、墳、墓、何、以、報、先、親、  
蒼、再、二、周、星、獨、有、斯、氣、隨、嗟、予、  
難、弟、死、豈、忍、与、汝、隨、屈、伸、付、天、  
地、生、死、又、何、難、生、南、宮、天、寬、  
張、四、維、死、為、忠、義、鬼、極、天、護、  
皇、基、

新曲浦島  
坪内逍遙作  
明治三十七  
年成

弘化して仲冬老于北地萬  
飾神心後村尚也  
幸陸 際虎

正 氣 歌

ない所へは嫁ぐまいと決心させた  
のは「十三夜」のお關ではないか。徒  
らに理想とやらに憧れて、老いたる  
父母にさんく、歎を見せ、後でやつ  
ぱり其の父母が慕はしくなつて現  
實界に還つて來た「新曲浦島」の太郎  
は、熱血湧きかへる多くの青年に向  
つて、理想は現實を離るべからず、唯  
此の現實界をさながらに淨土と觀  
じ、極樂と化すべきものであるとい  
ふ信念を鼓吹したのではなからう  
か。涙に沈める婦女、貧に苦しめる

青年をして、再び生氣を呼び起し蘇生せしめるものは、すべてこれ文學ではないか。文學は人生の力である。此の力を得て此の力を利用せんとし、此の力によつて其の天福に與らんとする努力は、およそ人間の努力中にあつて、最も神聖な、最も高い努力の一つである。宗教家が其の力を利用して自己の信ずるところの福音を傳へ、政治家が其の力を利用して經世濟民の具としたこと、古今東西其の例に乏しくないのである。

實に文學は人生救濟の具として道德宗教と並び立つ者である。従つて彼等の間には互に相聯絡交渉する所がある。而して文學の力の最も直接に其の影響を及す方向は道德の方面である。今文學創作者の立場からでなく、社會現象の一つとして文學を見るときには、其の影響は直接又は間接に、益道德を助け、道德を高尙に

するか、若しくはその反對に直接又は間接に、道德を破り之を墮落せしむるかといふ問題に歸着する。

かやうにいろいろの影響があるから、見る人によつて文學の批評も違ふ。老人は、近頃の小説は實に風教を害するの甚しいものである。あれは絶対に禁止せねばならぬ。といひ、青年輩は、美は美である。風教と藝術とは世界が違ふ。といつて、現代の作物を歓迎する。いかにも青年の云ふ様に、美は美の繩張があるから、一概に風教云々を以てこれを律することは出来ぬ。さればと云つて、現代の作品をのみ追つてゐて、更に高尚な作物のあるのを遺れてゐるが如きは、これ亦賛成することが出来ぬ。文學と風教との關係問題は、理想境に達しない現實の人生に於ては、つまるところ一時の社會政策上の問題である。現今の道德に悖戻するが如き文學は、こ

れを禁止するのも政策上已むを得ないことであらう。しかし又一般讀者の趣味が漸々微妙に漸々高尚になるならば、文學上の作品も漸次理想に近づくことであらう。結局理想は善美一致の境にあるのである。(時代思想)

二 雄辯と文學

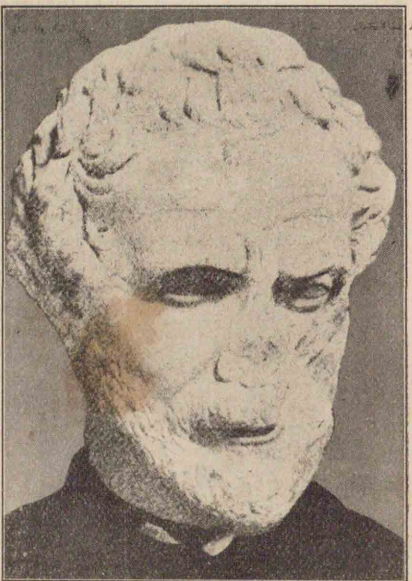
芳賀矢一

芳賀矢一  
文學博士  
昭和二年歿  
年六十一  
デモステネス  
西紀前三四  
〇年代の人

ギリシャのデモステネスは人も知つたる雄辯の大家で、ビスマルクの演説は近世獨逸文學の最も雄大な標本と見做されてゐる。西洋文學で辯論を貴ぶことは其の由來頗る久しく、辯論の力が筆の力と同じく世を動かしたことも尠くない。支那の昔の蘇秦張儀の辯はどんなであつたか。孟子七篇も孟子の論客であつたことを證する。莊子や、荀子や、墨子のやうな諸子の類も皆談論風發

當り難い感がある。

我が國は昔から言擧せぬ國といつて、議論が無い。母音に富んだ國語は、優美な歌や美文を發達させたが、議論文としては上古以來殆ど見るべきものが無い。



デモステネス

天照大神が天岩戸にお隠れになつた時、天太玉命の岩屋の前で奏せられた稱辭を大神の賞められた事も見えてゐるが、これも美しい叙事詩

の類であつたらうとおもふ。弘計皇子が新室賀に稱へられた室壽詞も、うつくしい韻文的のものである。祝詞も宣命も皆さうである。草の片葉も言やめてといふので、議論は無いのである。

言文が二つに分れてからは、尙更辯論で人を動かした場合は無い。これは政治組織、社會組織も違ふから辯論を用ひる場合が無かつたのである。舊幕府最初の使節が始めてアメリカの議會を



傍聴して、まるで日本橋の魚市のやうだ。といったのは當然の言である。

併し今日はこの魚市場が日本にも開設せられた。從來辯論に慣れなかつた我が國民は、最初は日本語では演説は出来ないものと悲觀したが、其の後演説會や講談會が盛んに行はれ、議論も開かれるやうになり、速記術も發達するやうになつて、今では日本國も大きに言擧するや

うになつて來た。雄辯な大家も澤山出來て來た。これは今後益發達するであらうし、又發達しなければならぬと思ふ。辯論の勢力は或場合には筆力よりも強く、且つ直接である。又速記術のある以上、文としても後に遺り、遠くに傳はりもし得るのである。

雄辯家は議論の構造順序がよく整頓して居らねばならぬ。又其の言語に氣力精神が籠らねばならず、其の他身振舉動にも、人を感動する力が無ければならぬ。それ等が集つて筆力以上の影響を聽衆に及すものである。これ等は種々雄辯法といふ類の研究も出來てゐるであらうと思ふが、今一つ大切な事は人の情に訴へることであらう。即ち如何なる議論に於ても單に理性に訴へずして、人の感情を刺戟し、直ちに人の肺腑を衝くといふ趣が無ければならぬ。換言すれば、眞の雄辯は美文學の範圍にはひらなけれ

ばならぬのである。如何に議論が正々堂々でも、單に人の頭にばかり訴へるのでは効力が薄い。必ず人の心に訴へることが無ければならぬ。

雄辯家が種々の譬喩を交へ、例話を引き、詩歌を誦し、正面から理性的にいふべきところを、側面から感情的に述べるのは、即ち理性の文へ感情の文を交へるので、元來論説の注入を目的とする演説をして、幾分か純文學の範圍に立入らしめるのである。それでは、人を感動させ、影響させる力が薄い。古來雄辯家として後世に傳へられる程の人は皆一方に於ては文學者たる資格があるのである。雄辯家にならうといふ人は、必ず深く文學趣味を養ひ、古今東西の文學に通曉する必要がある。天太玉命が天照大神を天岩戸からお出になるやうに導いたのも、弘計皇子が皇胤たるこ

とをお知らせになつて、遂に皇宮に戻られたのも、皆この美辭の聽者を動かした結果である。孟子や莊子は其の議論の論理ばかりで世に行はれてゐるのではない。むしろ其の文學的價值から千歳不朽になつてゐるのである。釋迦の説法も、其の文學的趣味を以て萬世の渴仰者を得てゐるのである。

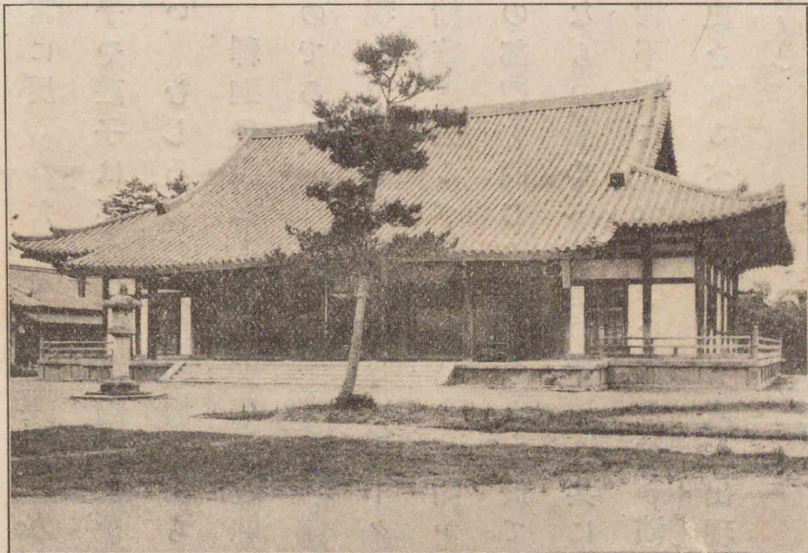
辯論の發達は明治時代の一現象である。しかもビスマークの演説のやうに、最近日本文學の精華と見るべき演説はまだ聞かれぬ。明治時代はすべての文學の部門と同じく、辯論の上に於ても立派な産物を後世に遺さねばならぬ。時事問題の消滅と共に消滅するやうな演説ではなく、萬世不朽に日本文學を飾るべき演説が出来ねばならず、永世に文學史を飾るべき辯論の大家が出現せねばならぬとおもふ。(筆のまに〜)

藥師寺  
奈良縣生駒  
郡郡跡村に  
ある

三 藥師寺の花會式

高野辰之

奈良の春は決して嫩草山や八重櫻に於てのみ味はふべきでない。我等が珍賞しさうな古玩に對しても、これは新しい、鎌倉時代の物で、といふ此の地方には、堂塔の内、古佛の前に行はれる會式に、遠い、昔からの作法が今も年々繰返されてゐる。藥師寺の花會式は其の優なるものの一つであらう。

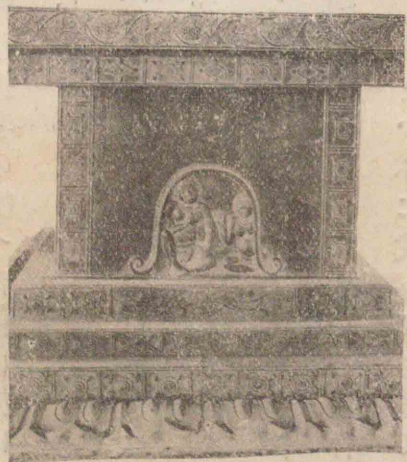


藥師寺金堂

呪師  
呪文を唱へ  
印を結び種  
種の秘法を  
修するもの

毎年四月一日より五日の夜迄藥師寺では修二會が執り行はれる。二月に修せられる法會の意であるが、往昔修正會に演ぜられた呪師の秘法も、鬼追の式も、此の修二會の果ての夜に演ぜられるのであれば、名は修二會であつても、幾つかの作法が併せ行はれてゐるのである。

寺領僅かに三百石で貧しい寺であつたといはれる藥師寺が、もしも豊臣氏に代つて徳川氏が榮えなかつたなら、それはどんなに興隆したことであらう。秀吉によつて假本堂の營まれた此の寺は勿論太閤の世、其の子々孫々の世を永かれと祈



本尊の臺座

つたのであつた。かうした寺が實權掌握者の變つた世に於ける悲慘さは改めて語るまでもあるまい。

藥師寺は貧しかつた。それでも本尊様はじめ秘佛に於ては富んでゐた。佛足石や其の歌の碑ばかりが、白鳳年中に建てられた東塔ばかりが、それが見學者の注目する處となつてゐた。今でもなつてゐる。案内人は此の御佛は總てが十四金といひ、闍浮檀

白鳳年中  
凡一三〇〇  
年前



藥師寺本尊

金といふに代へて白金でもいふ。本尊が相好圓滿におはします外に、臺座の模様も奇古を賞すべきを指さしもあるであらうが、其處に行はれる

古密教  
空海が創めた眞言宗以前の密教

唄散華…  
四箇の法要と稱へて少し大きな佛會にはきつと行ふ

會式にゆかしい由緒の伴ふこと、役小角以來の古密教の作法の存することとは、嘗て一たびも説いたことは無いであらう、パンやサンドウィッチの携帶者には、それを説かないのも尤ではあらうが。我等は寺から招かれて、同志四人で伊勢路から向つた。雨の笠置に一夜を送つて、

第四日目の夜の作法からを拜觀した。唄散華梵音錫杖の外にあれがこれかといふことは説くまいが、法隆寺のあの管長様までが華



藥師寺東塔



皿を持つて、衆僧と共に行道をなされたことは略し難い。石甃の上  
上に設けた坐床、其の上に並べた机に向ふ者は二十人に近くても、  
参拜者は我等の四人だけであつたことも記しておきたい。殊に  
本尊の御前には堆い造花のそれが美しく御燈みだに照り映えてゐた  
ことは聲を大きくして述べて置きたい。花會式の名はそれによ  
つて起つたのである。

堀河院の嘉承二年のことと聞く、中宮様が御病篤く渡らせられ  
た時、此の藥師の御前に造花を捧げて平癒を祈らせられて、めでた  
く本腹遊ばされた。其の献花が、吉例嘉儀として今に反復せられ  
るのである。梅櫻藤山吹百合、此の五種が花瓶に組合せて色美し  
く幾百本となう供へられて、本尊も脇立の日光月光兩菩薩も花の  
中に立たせ給ふのだ。六十日を費して造る花、其の花びらの一つ

堂童子  
堂内の使用  
人

にも深い、信仰が籠つてゐるのである。防火の利益があると  
して其の一枝を得ることが難事とされるのも其の筈である。

おう忘れようとしたが、院住の肥大な體軀から發せられる、堂童  
子々々々半夜の鐘といふ聲は、いたく堂内の空氣を振撼せしめ、そ  
れと共に、撞鐘が、太鼓が、螺が、ガンドンブーと繰返されたこと、これ  
が確かにわが古戰場に於ける士氣鼓舞用の吹奏であつたのだな  
と感じたことだけは述べて置きたい。わが古戦法に奈良法師の  
参加してゐたことが今更に知られる心地がした。さう、筒井順慶  
もつい此處に近い所にゐたのであつた。  
果ての夜の呪師の作法、額に日を金で表した金欄ぼしの牟子ぼしをかぶ  
り、印を袖の内に結んで、須彌壇を幾匝かするあの作法、秘法と稱へ  
られるものであれば、俗の我等に説き出さるべくも無いが、古書に

劍手つるぎのてとあるものがまだ修せられてゐることは記しておきたい。雙劍を交へて額にあて、腰下に支へ、天地上下段に構へて、足取を小刻みにして幾匝かするあの作法、壇の四隅毎に勇ましく呪師が身の一廻轉をなすその威重さよ、平安期の末期、これが修正會の夜



鬼

の見物として喜ばれた頃には、劍手の外に文珠手武者手などと呼ぶものが合せて十手もあつたといふ。それがたつた一手だけが遺つてゐるのだが、古密教の作法で

あるのだと思へば、尊くもあり物怖ろしくもある。

第四夜までに引きかへて、果ての第五夜には幾百人かの參詣人が堂内に詰めこまれる。其の人たちは荒薦の上に坐つて、立つて、此の壯嚴な式を拜するのだ。我等が床を與へられて、衆僧の末席を汚したのは勿體ないことの限りであつた。

喧しさは鬼追の式に至つて極まつた。ガンドンブーに合せて、赤鬼青鬼黒鬼が松明しょうめいを持つて須彌壇の周りを荒れ廻る。毘沙門天が鉾を左手に、松明を右手にしてそれを追ふ。勇壯とか豪快とかのありふれた話は、到底此の場の光景の幾分の一をも傳へ得るものでない。鬼と鬼との打合の烈しさよ、燃えぼこりの怖ろしく四散することよ、原始的な此の火祭ほど森嚴なものはないであらう。夜の七時に始まつた式は、鬼が堂外に追拂ひつくされた十一

比叡の……  
寒月や衆徒  
の群議の果  
てて後  
燕村

時近くに終つた。騒擾が静まつて人々が歸り去つた後の静けさよ。比叡の山なら、それは寒月がふさはしからうが、奈良の平野には朧の月が似つかはしい。折ふし雨であつたが、火のあとの雨は決して悪いものでなかつた。

奈良の四月には花の外に花會式がある。

四 平安朝時代の郊外

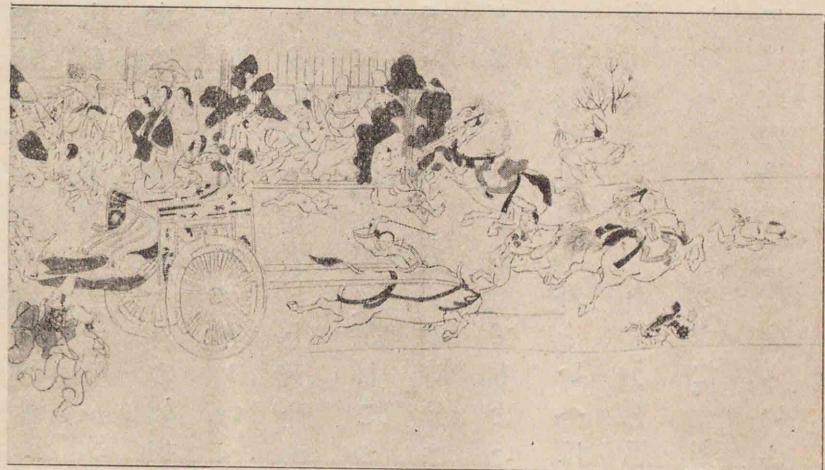
佐々政一

佐々政一  
文學博士  
大正六年歿  
年四十六

平安朝は奈良朝文化の後を受けて、我が國の歴史上に燦然たる文明の光彩を放つた時代である。後世の制度文物は、實に多く其の範を此所に得て居つたのである。併し如何に文明が進んだといつても、交通といふことに就いては、上代よりは道路も完全し、種の方法も講ぜられたであらうが、決してまだ今日のやうなもの

では無かつた。自分の住宅から三里も四里も遠い處に、事務所や店を置いて、朝夕三十分か一時間で電車に乗つて通ふなどといふ事は、其の時代の人々の夢想だもしなかつたことである。此の時代は、別して乗物などといふものは牛車か馬の背を利用した位のもので、それも殆ど上流社會の人に限られて居て、下層民は唯定まつた自分の仕事を、毎日こつ／＼と仕て居さへすればよかつたのである。従つて其の時分は、現代の郊外生活といふやうな事は、殆どなかつたと云つてもよい位であつた。

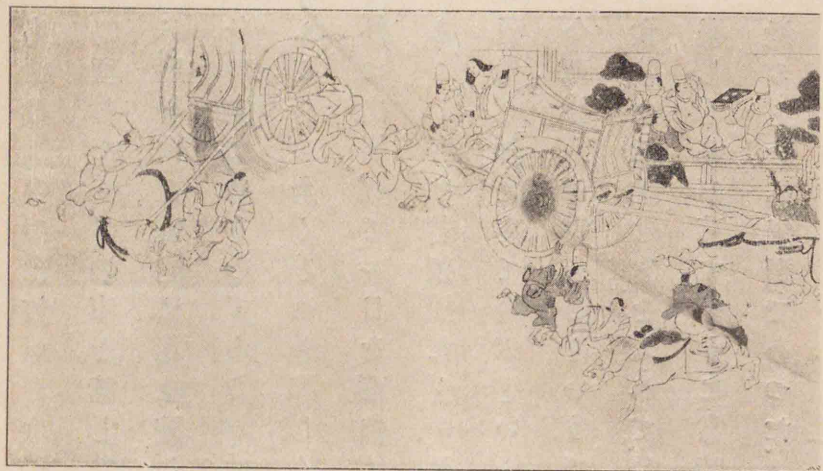
此の時代の郊外といへば、まづ主として嵯峨野や河東白河邊を指すのが適當であらうと思ふ。當時この邊は、住宅地といふよりは、寧ろ遊歩場であつた。和歌にも詠まれたやうに、正月の子の日には、此の邊で小松引といふやうな事が、盛んに行はれた。それは



(卷繪事行中年)車牛

京都の公家達や其の他上流の人々が郊外に出掛けて行つて、小さな木を引抜いて遊んだのである。小松引といつても、必ずしも小松ばかりでは無かつた。何でも其の近邊に生えて居る小さな木であればよかつたのである。そして、それを家に持つて歸つて前栽まへざいに植ゑて眺めた。又秋になると、一寸之に類した事があつた。

前のは主として木を引抜いて來たのであつたが、是は草類を掘るの



同 上 續

である。萩だとか桔梗だとか、刈萱女郎花など種々の秋草を、めい／＼掘つて來て、それを前と同じやうに、前栽に植ゑて楽しんだのである。で、此等は、現今私どもが茸狩に出掛けたら、釣りに行つたりするやうに、前栽に植ゑて置いて、後でそれを眺めて楽しむといふやうな事も、無論したには違ひ無いが、主として、掘りに行くのが楽しみであつたのである。茸狩でも、魚釣でも、行く人は茸を食ふ爲や、或は魚を食ふを目的で

出掛けるのでは無い。取つて來たり釣つて來たりすれば、それを料理して、一日の事を話しながら食ふのも、無論愉快には相違ないが、出掛ける目的は、茸を捜し廻つて取ること、魚を釣ること、それ自身の中にあるのである。此の時代の小松引、或は前栽掘などといふことも、全くそれと等しく、敷物や、辨當などを從者に擔がせて郊外に出掛けて、一日を面白く騒ぎまはるといふ事が楽しみなのである。春は若菜摘だとか、又秋になれば秋で、月見蟲聞野遊びなど、兎角郊外に出て遊ぶといふ風習が盛んであつたやうである。現今西洋人が安息日というて日曜日には家業を休んで、提籠の中に食物や飲物などを入れて、公園又は郊外の草原などに出て、一日を楽しく遊び暮すやうに、當時の人達も、やはり楽しい一日を郊外に送るといふ風習であつた。

そんな工合であつたから、同じ嵯峨野の中にしても、特に眺めのよい處とか、或は又、地勢や何かの關係から人々の多く集まる處とあまり行かぬ處とはあつたに違ひないのであるが、特に人の多く集まる處だからと云うて、其等の人の爲に休息所といふやうな物の設けは無かつたらしい。尤も當時商業などに就いては、あまり記録が無いので、よくは知ることが出来ないけれども、其の頃の物語類などに、さう見えない所を見ても、まづ無かつたものらしく思はれる。

此の時代には、各人が莊園といふものを作ることを考へて居つた。それは後世でいふ領地のやうなもので、どこでも開墾しきへすれば、それが自分の領有となつたのであつた。だから近郊の地は大部分誰かの莊園となつて居つたのである。従つて此等の土

地を耕す下層民は、今から見れば、まるで小屋のやうな物であつたらうが、兎も角住居を作つてゐたのである。

貴族の別荘などは景勝の地に建てられてあつた。鳥羽龜山水無瀬なみなどといふ處には、皇族方の御別荘も建てられてあつて、或は其所に常住せられ、或は時折の遊山に成らせられることもあつた。又此の時代は文學の非常に盛んな時であつたので、詩や歌の會などは、主としてこの別荘のやうな所で行はれた。

見渡せば山もと霞む水無瀬川

ゆふべは秋と何思ひけむ。

などとおよみになつた後鳥羽院の水無瀬殿などは、實に當時有名なものであつた。

當時の公家達の間には、分家といふことが盛んに行はれた。娘

見渡せば……  
新古今集所  
載  
水郷春望  
といふ題

が出来ても、今日の普通の習慣のやうに其の娘を他家へ遣る即ち嫁入りといふことをさせない。他家からお婿さんを貰つて別に一軒の家を持たせるといふのが其の當時の習はしで近代とは大きに相違するのであつた。であるから娘が年頃になると、もう別の家に住ませねばならない。そこで當時の貴族達は家を何軒も持つてゐなければならなかつた。また子供が一人前になると自分の家は子供に譲つて、自分達は隠居するといふやうな事も起つて、さうした人達が、郊外に家を建てて住まつてゐるといふやうな例もあるのである。で、當時の人は、多く隠居すると僧になつた。従つて其の住宅は寺となつたのであつた。故に昔の寺は決して住家と變つたものでは無かつた。各人の住宅が其の儘寺となつたのである。後年禪宗が渡つて來てからは、寺に種々な形式を用

ひるやうになつたけれど、當時は別に變らなかつたのである。だから、今でも京都のごく古い寺を見ると、當時の住宅と少しも變つてゐない。

そしてさうした住宅は、垣も低くし、門なども極めて開放的なものであつた。住宅に塀や何かをつけるやうになつたのは、武家時代からの風習であつて、當時は極めて開放的であつたのである。陛下が舞を御覽ぜらるゝ爲に、近郊の地に舞臺を作られて、一方に玉座が設けられる。陛下が其所から御覽になつてゐらせらるゝと、すぐ左右から公家達が侍して、同じく拜觀してゐる。すると、向ふの岩蔭や叢の中からは、土地の下人どもが首を突出して、等しく其の舞を拜觀するといふ有様であつた。當時の上流人と下層民とは、其の生活状態から見ると、非常な距離があつたのであるが、斯

うした事に就いては、下層民だからといつて、無下に叱りとばす程狭量では無かつたのである。別荘などで、戸を開放して置くと、外面を使が走るなどが、座敷の中からよく見られる。それをむしろ興ある事に思つて居つたのであつた。

さうした別荘や寺は、大きなものは種々の方法に依つて保存されるけれど、小さいのは主が無くなると、其の儘立朽れになるので、空家や破家といふものは到る處にあつた。彼の有名な小督の局が身を寄せられたと云ふのも、或はさうした所であつたかも知れない。國司にでもなつて遠國に出向く時などは、隣人に其の家を託したものであるが、頼まれた人も、自分の家で無いから、掃除なども満足にはしてくれない。そんな工合で、三年なり四年なりの任期を終つて歸つて見ると、眼も當てられぬやうになつてゐたなど

といふ事は當時に於て、決して珍らしいことでは無かつたのである。

以上の如く平安朝時代の郊外は、大方上流の莊園などになつた處が多くて、別莊なども設けられはしたが、主として遊歩場であつたのである。併し又中には、西八條の大臣が——西八條といへば京都の中ではあるが、當時其の邊りは大分空家などが出來て、殆ど郊外同様になつて居つた——毎朝牛車に乗つて、出仕するに、冬の寒い時などは、せんじやく温石といつて、石を焼いて温めた物を懷に入れては通はれたのであるが、遂には餅を焼いてそれを懷に入れて暖を取りながら通はれ、牛を御する僕も、嘸寒からうと云ふので、小さいのは一つづつ、大きいのは半分にして僕にも與へ、互に其の餅の温味に暖まりながら通はれたなどといふ話もある。

(醒雪遺稿)

藤岡作太郎

文學博士

明治四十三年

歿

年四十一

五 柳緑花紅

藤岡作太郎

遊子學んで二十餘年、たゞ惑に溺れ、

既に現在に飽いてまた當來を懼れ、

疑惧煩悶、衣食も安からず、

ひとり一个の笠に苦みの頭を包みて、

千年年毎に新なる舊都の春にさまよへば、

柳緑花紅更にわが胸を傷ましむるかな。

比叡の麓にわたれる霞は、近く春風に匂ひ、

愛宕の嶺を越せる雲雀は、俄かに脚下に墜つ、

指す方に繪と見ゆる祇園清水三峰、



塔影小さきところ、色ほのかなる男山。  
麥隴菜畝歴史の印を残さざるはなく、  
無常迅速いづれも涙の跡なるよ。

隱僧  
兼好法師

安養淨土の法成寺もあはれこの淺茅原と、

雙なごりが岡の隱僧が昔語りも夢なれや。

木幡の外山松柏空しく薪と摧かれぬ。

二十年の榮華は沙羅雙樹の花の色。

六波羅殿はたゞ洛東に名を留むれども、

慘憺たる經營蜻蛉の命と共に何か残れる。

六波羅殿  
平家の邸

金城鐵壁の迹、桃の花うつろひて、

春草萌ゆる處たま／＼瓦片ぞ散りぼひたる。

伏見・桃山・幽鳥の轉るに任せて、

四海併呑の雄圖は淀の水泡と消えたり。

あゝ英雄の事業、大は即ち大なれど、

「時」の前にはたゞ風前の燈火。

悲しきかな生滅の鬼は日に／＼人を餌として、

惠も罪も愛も旭の霜と解け去りぬ。

英傑の遺業消ゆるは卒都婆の文字より早ければ、

爲すなき一生、あなかなしや。

秋風吹けば、梢の木の葉ちり／＼に、

互に急ぎ相逐ひて、もとの土にぞ歸るなる。

消ゆる待つ間の露とこの身を思へば、  
 恐は刻々にわが肉を削り去り、  
 すわる茵はうき雲の絶えずぞ揺るゝ。  
 いづこか驕傲なる「時」のかひなさを嗤ひ、  
 永劫の片はしをわが隠れ家として、  
 不變の囁に慰樂の聲を求むべき。  
 宇治の浮舟流るゝ跡の消ゆる如、  
 はかなく過ぎし五十餘帖の物語、  
 やさしき筆をたどりにし主は淑女の名のみして、  
 若紫の色はあせ、匂は残る九百年。

繙く人はあやしく墨の香に酔ひて、  
 わが身をもうき世の事をも忘るなる。

わが世を捨て、文學の野に分け入れれば、  
 樹々も干草も花咲き亂れ、實なりこぼれ、  
 くしき女神の眞玉なす手に招くなる。  
 時もや過ぐる、世もや歴る、常なき事の忘らるゝ、  
 蓬萊瀛洲もたゞ詩人の想より、  
 人こそ朽つれ、筆の命毛永くこそ。

補陀落や岩うつ波とくりかへす、  
 東寺の禮讚、振鈴聲すみて、そゞろ涙ぞ進むなる。

補陀落や  
 打つ波は三  
 熊野の那智  
 の御山にひ  
 びく瀧つ瀬  
 (西國順禮  
 歌)

遍照金剛  
空海の戒名

幾千人か祈るなる遍照金剛の聲々の、  
一息づつに大師の御姿現る、  
この世の限なり出でん人の心に刻まる、  
尊き碑、時の嵐もいかにせん。

英傑は我のみ立て、世人を土埃と散らし、  
大聖は我を空しうして世人の爲に棄つ。  
英傑死すれば世人は背き去つて顧みず。  
大聖世を去れども世人は幾度もまた大聖たり。  
生死流轉はわが前に雲煙よりも淡く、  
眞如實相の月ぞ長へに明らかなる。

宗教は秋山の下水壯夫文學は春山の霞壯夫。

これは櫻花の散りては年々に色鮮かに、  
かれは常磐の松の千歳も數ならず、  
濁れるを清くし疑へるを信ぜしめ、  
うたかたの世より無限の仙境に誘ふ。  
あはれはらから、この同胞よ。(東圃遺稿)

六 平安朝時代の文學

高野辰之

桓武天皇が都を平安京すなはち今の京都にお創めになつてから、源頼朝が鎌倉に幕府を立てる迄の四百年間を平安朝時代といふ。當代は都が山紫水明の地にあつて、藤原氏が驕奢を極めた時代である。一に王朝時代ともいふが、むしろ藤氏盛衰の時代であ

る。  
 前の奈良朝時代に唐風を摸して、我が國に不釣合な大政府がつくられたが、實際にはそれ程の政務はなかつた。三韓はもう我が有でなく、蝦夷が折々不穩であつた位で、彼の八省の百官は日々無聊に苦しんでゐたのである。無聊の者は遊惰に耽り易くて風俗を亂す。加ふるに佛教は多く無常輪廻を説き、此の世を穢土火宅と教へて、淨土往生を勧めたので、こゝに上古以來の尙武の風は失せて、滿廷の百官は柔弱怯懦の人となりつくした。藤氏は相ついで權を廟堂に恣にし、世の泰平に慣れて深殿の中に、みやび男、優さ男と化して、月花に物の哀れを觀じ、兵馬の大權は之を下官に任せて、徒らに位祿を貪り、驕奢と豪遊とに日を送つた。さうしてこれが當代人の羨む所であつた。かりそめの煩にも、それ加持、それ祈

禱と、一に僧侶に託して、物の化や生靈の祟りを去らうとしてゐた。こんな時代の文學は當然優美であり、艷麗ではあるが、勇壯味や豪快味を缺く筈である。詩に散文に、何れも大宮人の櫻かざして遊ぶさまや、胸の思に身を焦すさまばかりが現れてゐる。

## 甲 詩

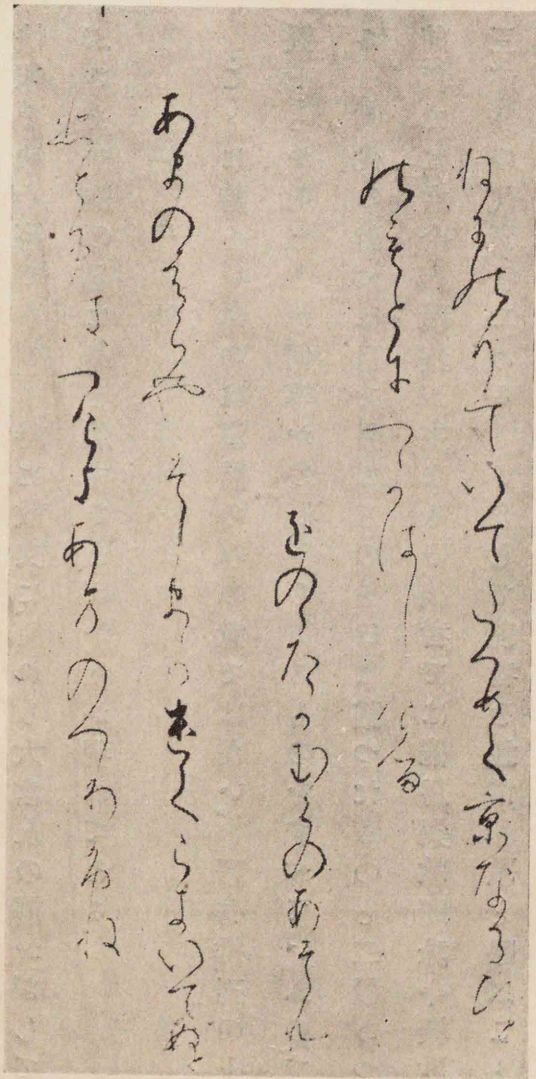
こゝに詩といふのは漢詩のみの意ではない。語句排列の上に、五七とか七五とか何等かの制限のあるものをすべていふのである。當代の詩には目で見ると、口に謠つたものと二種あつて、前者では古今和歌集が主なもの、後者では催馬樂歌朗詠今様歌の三が其の代表者である。さうして前者を通常和歌と呼ぶことになつてゐる。

## 1 和歌

平安朝時代の始は漢詩漢文のみが大いに行はれて、和歌は彼の六歌仙即ち在原業平や小野小町等によつて作られたのみである。

業平  
清和天皇  
貞觀八年(一  
五二六)歿  
年五十六

(ふれにの  
りていでた  
つとて京な  
るひとのも  
とにつかは  
しける……  
…(古今集)



紀貫之筆蹟

それが醍醐天皇の時遣唐使が廢せられてからは漢學は漸々衰へて、こゝに國文學が始めて榮えることになつて、和歌にも續々名人

が出た。

古今和歌集は醍醐天皇の勅を受けて、紀貫之凡河内躬恒壬生忠岑等が延喜五年に、萬葉集後百年許りの間に出た歌の中から佳作を撰んだもので、主な作者はやはり業平小町貫之躬恒忠岑等である。卷は二十、歌の數は千百、これが勅撰歌集の嚆矢である。賀茂眞淵は、萬葉集は男らしく、古今集は女らしいと評したが、想の上にも詞の上にも、此の二者には著しい相違がある。

在原業平

小野小町

世の中にたえて櫻のなかりせば春の心はのどけからまし。  
思ひつつぬればや人の見えつらむ夢と知りせばさめざらましを。

貫之  
村上天皇  
天慶九年  
(一六〇六)  
歿  
年六十五  
躬恒  
醍醐天皇  
延喜七年  
(一五六七)  
歿  
年四十五

紀 貫之

櫻花咲きにけらしなあしびきの山のかひより見ゆる白雲

凡河内躬恒

かくばかり惜しと思ふ夜を徒らにねて明かすらん人さへぞ  
うき。

大江千里

月見れば千々に物こそかなしけれ我が身一つの秋にはあら  
ねど。

歌の材料は四季の景物と愛情とが主で、技術は大いに進歩して  
あるが、雄々しい萬葉の風は失せて、如何にも平安の都の人の手に  
出来たらしい歌のみである。又、讀人不知の

世の中は何か常なる飛鳥川昨日の淵は今日の瀬になる。

百千鳥囀る春は物ごとく改まれども我ぞふりゆく。

残りなく散るぞめでたき櫻花ありて世の中果のうければ。

など何れも佛教思想の感化で、此の類の歌が極めて多いのである。  
さうして歌合の流行からであらうが、長歌は殆ど廢れてしまつて、  
いつも題詠が主で、目で見て味ふ歌のことであつたから、互に巧緻  
を競ふことになつた。そこで修辭の上だけでは、萬葉集の歌より  
も進んでゐるので、此の歌集の歌は、花實兼備のものとして永く模  
範とされた。

古今和歌集の後村上天皇の朝に後撰和歌集、花山院の頃に拾遺  
和歌集と引續いて撰ばれたが、何れも古今和歌集には及ばない。  
一條天皇の御代には多くの才女があつて、此の頃に後拾遺和歌集  
次いで金葉詞花千載の三和歌集は勅撰によつて出来たが、萬葉集

順  
圓融天皇  
永觀元年  
(二六四三)  
歿  
年七十三  
公任  
後朱雀天皇  
長久二年  
(二七〇一)  
歿  
年七十六  
俊成  
土御門天皇  
元久元年  
(二八六四)  
歿  
年九十一  
經信  
堀河天皇  
承德元年  
(二七五七)  
歿年八十二  
能因  
俗名橘永愷  
歿年不明  
俊賴  
經信の子  
歿年不明

の風には勿論古今集の風にも遠ざかつて、輕妙巧緻を希つたり、新奇を衒つたり、漸々技巧の末に走つてしまつた。それでも作者に源順・藤原公任・源經信・能因法師・源俊賴・藤原俊成等の名手があつて、

我が宿の垣根や春を隔つらん夏來にけりと見ゆる卯の花。  
源 順

朝まだき嵐の山の寒ければ紅葉の錦きぬ人ぞなき。  
藤原公任

夕されば門田の稻葉音づれて蘆のまろやに秋風ぞ吹く。  
源 經信

都をば霞と共に立ちしかど、秋風ぞ吹く白川の關。  
能因法師

源 俊賴

鶉鳴く眞野の入江の濱風に尾花波よる秋の夕ぐれ。  
藤原俊成

夕されば野邊の秋風身にしみて鶉鳴くなり深草の里。  
是等は秀吟として世にたゞへられた。

二 謠ひ物

奈良朝時代の和歌には、まだ諷謠したものもあつたが、當代に入つては、和歌は全く見て味ふものとなり、謠ふものは神樂催馬樂今様朗詠等の名の下に獨立した。

神樂歌は内侍所の御神樂に謠ふ歌で、古今和歌集に大歌所の歌として載せてあるのがそれである。又催馬樂歌は里巷の俗謠を外來の樂曲に合せる爲に、歌の句に種々の反覆や添加を施して用ひたもので、和歌に見られない面白いものがある。神樂の後に餘

興として謠はれ、私の遊宴にも座興を催すものとして謠はれた。歌材の方面は和歌に比すれば大いに廣い。

酒飲さけをたうて

酒をたうべて、たべ酔うて、とうところんぞや。詣で来る。なよろぼひそ、詣で来る。タンナ〜タリヤ、ランナ、タリチリラ。

老鼠

西寺の〜老鼠若鼠、お裳つんづ、袈裟つんづ。法師に申さん師に申せ。法師に申さん師に申せ。

無力蝦ちからなきがま

力なきかへる〜骨なき蚯蚓〜。

後二者の諷刺の如きは、他に其の類例を見出さず、千載後の今日にあつても、なほ極めて適切であることを感ぜしめるのである。

今様は又雜藝ざふげといふ總名の中にも取入れられるが、先づは七五の句四つを重ねたもので、弘法大師のいろは歌は既に此の形であつた。催馬樂に少し後れて、當代の末に至つて盛んに行はれたものである。これに法文歌、神歌の類さま〜あつて、

萬の佛の願よりも、千手の誓ぞたのもしき。枯れたる草木も忽ちに、花咲き實のると説いたれば。

松の木かげに立寄りて、岩漏る水を掬ぶ間に、扇の風も忘られて、夏なき年とぞ思ひぬる。

鴉は見るに色黒し。鷺は年は経れども猶白し。鴨の首を短しとてつぐものか、鶴のあしをば長しとて切るものか。

の如き味のあるものに富む。

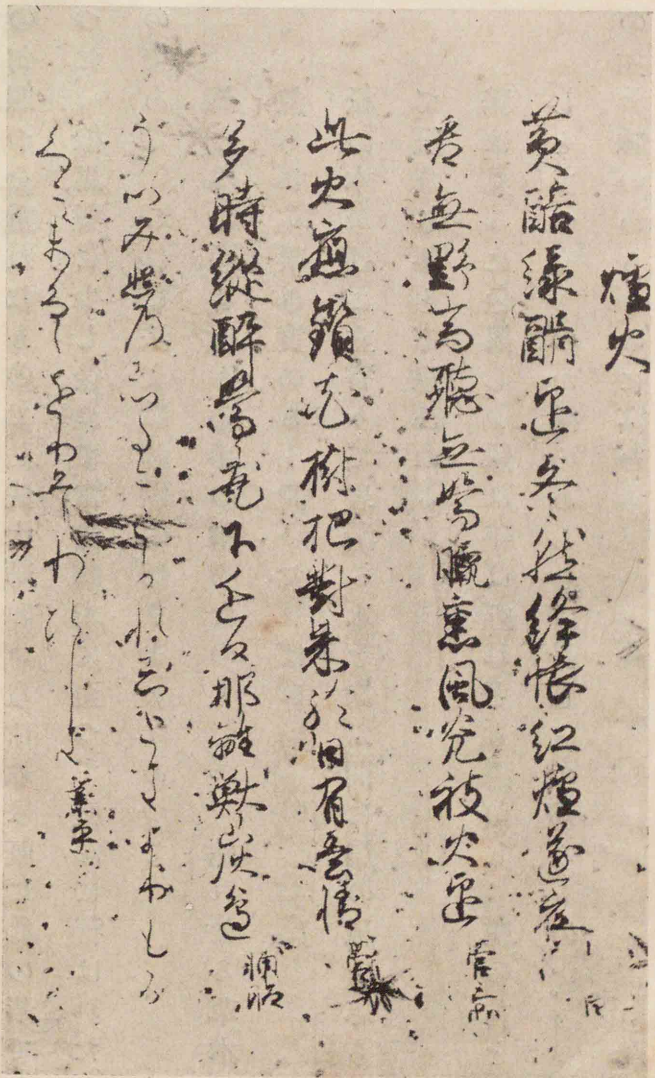
朗詠は今様よりも少し前の時代から行はれたもので、和漢文



人の手に成つた漢詩や漢文の句にふしを附けて吟詠するの謂で

爐火

黃醅綠醕迎  
紅爐逐夜  
開。白看無  
野馬一聽無  
光被。臘裏風  
香。此火應  
鑽。花樹。把上  
對來終日有  
春情。香多  
時縱醉。鶯  
花下。近日  
那離。獸炭  
邊。難。踏  
うづみびの  
したにこが  
れしときよ  
りもかくに  
くまるゝな  
りぞわびし  
き。葉平



公任筆詠

あつた。藤原公任によつて和漢朗詠集二卷藤原基俊によつて新

撰朗詠集二卷が編まれた。一二の例を示せば、

東岸西岸之柳 遲速不同 南枝北枝之梅 開落已異

三五夜中新月色 二千里外故人心

長生殿裏春秋富 不老門前日月遲

乙 散文

奈良朝時代から當代にかけて假名文字が發明せられたので、これによつて我が國民は其の思想感情想像等を現す上に非常な利便を得て、前述の詩のみならず散文の方面にも種々の見るべき作品を出すに至つた。當代の散文を分けて、物語隨筆日記雜史の四とする。

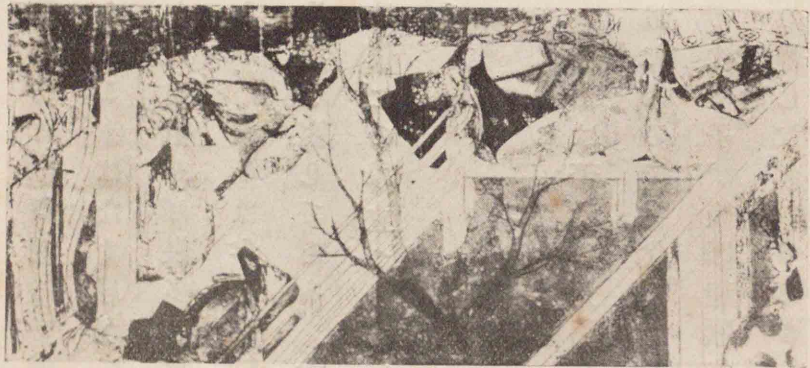
一 物語

最も古いのは竹取物語で、作者は明らかでない。當時の貴族連

が竹の中から出たかぐや姫といふ美人に懸想して、姫に龍の腿の玉とか、火鼠の裘とか、燕の子安貝とかの珍寶を求められて、何れも失敗に終るといふ滑稽譚であるが、相當に諷刺の意がこもつてゐる。恐らく當代人は單に笑話とのみは考へなかつたであらう。

竹取に次いで古いものは伊勢物語である。在原業平一代の歌に關する話が主材で、事實譚もあれば、面白をかしくこぢつけた所もある。作者は同じく不明で、何人か業平自身の記述に筆を加へたものらしい。

伊勢物語の後には隨分物語は多く出たが、其の代表作は源氏物語であつた。源氏物語は紫式部の著作である。式部は藤原爲時の女で、幼い時に、兄の惟規が父から史記を學ぶ側にて、兄より先に覺え、父をして若し此の子が男であつたらと思はせた程の天稟



源氏物語繪卷

の者であつた。長じては和漢の書は勿論、佛典にも通じ、歌文は其の最も得意とする所であつた。藤原宣孝に嫁して、早く夫に別れ、暫く寡居して上東門院に宮仕をした。此の寡居の間即ち一條天皇の長保の末、寛弘の始頃に源氏物語は作られたらしい。五十四帖から成る大作で、前篇四十四帖は源氏の君といふ容姿は素より秀麗で地位は高く、才もあれば學もあり、親切でもありする處、當時の理想的男子の一生を敘し、これに紫の上といふ絶世の佳人を配して、花の宴に、紅

葉の賀に、歌舞管絃の樂しみに、工藝美術の粹を集むるに、何一つ足らぬことはなく、思つて叶はぬことはないといふ筋である。随分と入り組んだ幾多の事件、無数の人物は何れも巧に描き出されてゐる。後篇は宇治十帖と呼ばれるもので、源氏の君の子薫大將の生涯を寫してある。大將は父の境遇とは全く違つて、終始失意の地位にのみ立つので、自然其の描寫も沈鬱で、悲哀の調を帯びてゐる。

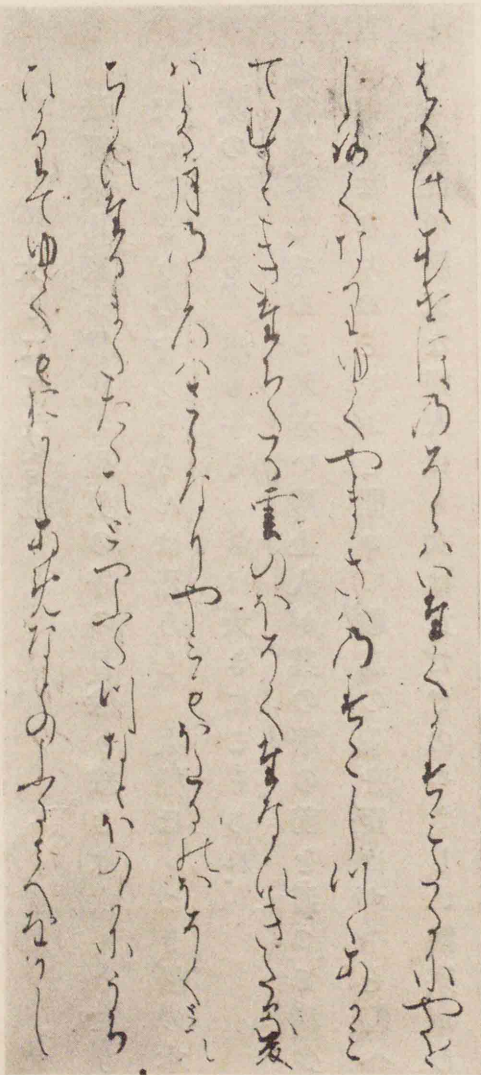
## 二 隨筆

隨筆は著者の見聞したことや、感じたことを其の折々に書きつけたもので、當代の文學では枕草子の一書だけがそれである。

枕草子は後撰和歌集の撰者であつた。清原元輔の女清少納言の著したものである。此の人が一條天皇の皇后定子に仕へて、雪

ほるはあけ  
ぼのそらは  
いたくかす  
みたるにや  
うやうしろ  
くなりゆく  
やまぎはの  
すこしづゝ  
あかみてむ  
らさきだち  
たる雲のほ  
そきたなび  
きたる夏は  
よる月のこ  
るはさらな  
りやみもほ  
たるのほそ  
くとびちが  
ひたるまた  
たゞひとつ  
ふたつなど  
ほのかにう  
ちひかりて  
ゆくもおか  
しあめなど  
のふるさへ  
をかし

の朝に才名を博した話は恐らく知らぬものはあるまい。ごく敏捷で、才も學もあつたが、紫式部とは反對の性質の人であつた。



枕草子古寫本

枕草子には諸方面に關して叙してあつて、四季の景物と宮廷の有様との外に、めでたき物は、あさましき物はいふやうな物は、づくしのあるのが目をひく。文章は簡潔、觀察は犀利で、先の源氏物

語と異なるは作者の人となりの異なるが如くである。其の奇警と精緻と及び巧妙なる省筆とは、此の草子をして、源氏物語と共に當代の二大文學として推賞せられる因由をなしてゐる。

大きにてよき物

法師・果物家・餌袋・硯の墨、男の子の目、餘り細きは女めきたり。又かなまりのやうならんは恐ろし。火桶ほゞづき、松の木、山吹の花びら。馬も牛もよきは大きにこそあれ。

老後零落してゐる時、若い殿上人が其の家の前を通つて、清少納言も無下になりぬといふを聞いて、駿馬の骨を買はずやと答へたといふが、此の勝氣な婦人にも、女は女だけのやさしい觀察があつた。則ち

三つばかりなるちごの急ぎ這ひくる道に、いと小さき塵など

のありけるを目ざとに見つけて、いとをかしげなるを指にとらへて、大人などに見せたるはいと美し。尼にそぎたるちごの目に髪のおほひたるを、かきはやらで、打傾きて物など見る、いと美し。をかしげなるちごのあからさまに抱きて、うつくしむ程に寝入りたるもらうたし。

三 日記

日記は日々の出来事を記すものであるが、當代では日記といふ名の下に、紀行文と名づくべきものもあつた。當時男子は凡て漢文を用ひたので、先の物語でも、隨筆でも、此の日記でも、多くは女の手になつたのである。著名なのは、日記では紫式部日記、紀行では紀貫之の土佐日記と菅原孝標（よすけ）の女の更科日記。

四 雑史

假名文で書いた歴史をかう呼ぶのである。概ね物語體ではあるが、筆を曲げてないので、世の真相を知るには却つて他のおもてだつた史書よりもよい。主なものは榮華物語と大鏡との二書である。

榮華物語は村上天皇頃から堀河天皇頃迄の歴史で、藤原道長一代の榮華を中心にして叙してある。作者は赤染衛門だといふ説はあるが、しかとは知れない。文章は花やかに出來てゐる。

大鏡は文徳天皇から後一條天皇迄の記事で、崇徳天皇頃の人藤原爲業の筆に成つたものである。多く藤原氏の上を寫してあつて、文は簡勁と暢達とをかねてゐる。

右の二書の外に今昔物語といふものが出た。これは宇治大納言源隆國の著だといふ。此の人は極暑になれば宇治へ移居して

源隆國

白河天皇

承暦元年

(一七三七)

歿

年七十四

往來する者に茶を與へて其の見聞を語らせ、自分は障子の中にゐて筆記したのがこれだといふことである。随分妄誕な事もあるが、下層社會の精神界を探り知るには極めてよい。其の後作者は知れないが、此の續篇らしい宇治拾遺物語といふものが出た。彼の癩取の話は此の書の中に見えてゐる。

### 七 菅公の左遷

醍醐の帝の御時、時平のおとゞ左大臣の位にて、年いと若くておはしき。菅原のおとゞは右大臣の位にておはします。そのをり、みかど御年いと若くおはします。左右大臣に世の政を行ふべき宣旨下さしめ給へりしに、そのをり、左大臣御年二十八九ばかり、右大臣の御年五十七八ばかりにやおはしけん、ともに世の政をうち

菅原

名は道真

延喜三年

(一五六三)

歿

年五十九

昌泰四年  
一五六一年

せしめ給ひしほどに、右大臣はさへも世にすぐれめでたくおはしまし、御心おきても殊の外にかしこくおはしまし、左大臣は御歳も若く、さへもことの外に劣り給へるによりて、右大臣御おぼえ殊の外におはしましたるに、左大臣安からずおぼしたるほどに、さるべきにやおはしけん、右大臣の御爲によからぬこと出で来て、昌泰四年正月二十九日、太宰権帥になし奉りて流され給ふ。

この大臣の子ども數多おはせしに、女君たちは婚取し、男君たちは皆ほどづつにつけて位どもおはせしを、それも皆方々に流され給ひて悲しきに、幼くおはしける男君女君たち慕ひ泣きておはしければ、「小さきはあへなん。」とおほやけも許さしめ給ひしかば、ともにて下り給ひしぞかし。帝の御掟極めてあやにくにおはしませば、この御子どもを同じかたにだに遣さざりけり。方々にいと

悲しく思召して、御前の梅の花を御覽じて、

東風吹かばにほひおこせよ梅の花

あるじなしとて春なわすれそ。

また、亭子の帝にきこえさせ給ふ、

流れゆくわれはみくづになりはてぬ

君しがらみとなりてとゞめよ。

なきことによりかく罪せられ給ふをからく思し歎きて、やがて山崎にて出家せしめ給ひてけり。都遠くなるまゝに、あはれに心細くおぼされて、

君がすむ宿の梢をゆくゝも

隠るゝまにかへりみしはや。

また、播磨の國におはしつきて、明石のうまやといふ處に御宿り

亭子の帝  
第五十九代  
宇多天皇

せしめ給ひて、驛の長のいみじう思  
へる氣色を御覽じて作らせ給へる  
詩いと哀し。

驛長無驚時變改、

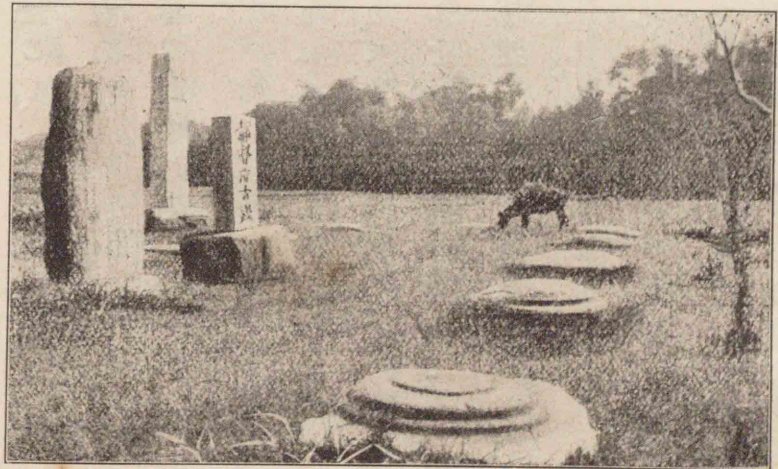
一榮一落是春秋。

かくて筑紫におはしまし著きて、  
あはれに心細く思さるゝゆふべ、遠  
方に處々煙立つを御覽じて、

夕されば野にも山にも立つ煙

なげきよりこそもえまさりけれ。

また雲の浮きて漂ふを御覽じても、  
山わかれ飛びゆく雲の歸り來る



大宰府の遺趾

驛長莫驚時變改一榮一落是春秋

夕されば野にも山にも立つ煙  
なげきよりこそもえまさりけれ。  
また雲の浮きて漂ふを御覽じても、  
山わかれ飛びゆく雲の歸り來る

大鏡古寫本

かげ見ると  
きぞなほ頼  
まるゝ。  
さりともと世  
を思しめされ  
けるなるべし、  
月のあかき夜、  
海ならずた  
だよふ水の

底までもきよきこゝろは月ぞ照らさん。  
これいとかしこくあそばしたりかし。げに月日こそは照し給は  
めとこそはあめれ。

居處  
大宰府

筑紫におはします所の御門もかためておはします。大貳の居處は遙かなれども、樓の上の瓦などの心にもあらず御覽じやられるに、またいと近く観音寺といふ寺のありければ、鐘の響をきこしめして作らせ給へる詩ぞかし。

都府樓纔看瓦色、  
観音寺只聽鐘聲。

これは、文集の白居易が『遺愛寺鐘欵枕聽香爐峰雪撥簾看。』といふ詩にもまさざまに作らしめ給へり。とこそ、昔の博士どもは申しけれ。またかの筑紫にて、九月十日の菊の花を御覽じけるついでに、まだ京におはしましし時、九月の今宵内裏にて菊の宴ありしに、この大臣の作らしめ給へりける詩を、御門かしく感じ給ひて、御衣賜はり給へりしを、筑紫にもて下らしめ給へりければ、御覽ずるに、いとゞ其の折思召しいでて作らせ給ひける。

文集  
白氏長慶集  
白居易  
號は樂天  
唐の詩人  
大中元年  
(西暦八四  
七)歿  
年七十五

後集  
菅家後集

去年今夜侍清涼、  
秋思詩篇獨斷腸。

恩賜御衣今在此、  
捧持毎日拜餘香。

この詩いとかしく、人々感じ申されき。このことどもたゞちりぎりなるにもあらず、かの筑紫にて作り集めさせ給へりけるを書きあつめ一卷とせしめ給ひて、後集と名づけられたり。また、をりをりの歌を書きおかせ給へりけるを、おのづから世に散りきこえしなり。

また、雨の降る日、うちながめ給ひて、

あめの下かわけるほどのなければや

著てしぬれぎぬひるよしもなき。

やがて、かしこにてうせ給へり。

夜の中に、この北野にそこの松をおほさしめ給うて渡り住み



北野宮  
官幣中社北  
野神社  
京都市の西  
北部にある

給ふこそは、たゞ今の北野宮と申して、あらひと神におはしますめ  
れ。おほやけも行幸せしめ給ふ。いとかしこくあがめ奉り給ふ  
めり。筑紫のおはしましどころは安樂寺といひて、おほやけより  
別當所司などなさせ給ひて、いとやんごとなし。(天鏡)

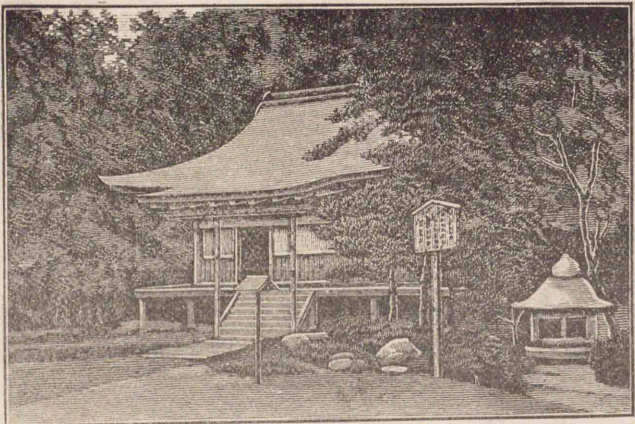
八 大原御幸

法皇  
後白河院  
建禮門院  
御名徳子平  
清盛の女  
安徳天皇の  
御母  
大原  
京都の北四  
里にある村  
北祭  
四月中の西  
の日に  
賀茂の祭

かゝりし程に、文治二年の春の比、法皇、建禮門院、大原の閑居の御  
住居、御覽ぜまほしう思召されけれども、二月彌生のほどは、風烈し  
く、餘寒も未だ盡きせず、峰の白雪消えやらで、谷のつらゝも打解け  
ず。春過ぎ夏来て、北祭も過ぎしかば、法皇夜をこめて大原の奥へ  
ぞ御幸なる。しのびの御幸なりけれども、供奉の人々、徳大寺花山  
院土御門以下公卿六人、殿上人八人、北面少々候ひけり。

小野の皇太  
后宮  
後冷泉天皇  
の皇后

蔓破れて……  
出處不明



鞍馬通りの御幸なれば、かの清原の深養父の補陀落寺、小野の皇

寂光院是なり。舊う造りなせる前水木立、由ある様の處なり。蔓

破れては霧不斷の香を焼き、樞落ちては月常住の燭を挑ぐ。とも、かやうの處をや申すべき。庭の若草茂りあひ、青柳絲を亂りつゝ、池の蕨波に漂ひ、錦をさらすかとあやまたる。中島の松に懸れる藤波の、うら紫に咲ける色、青葉交りの遅櫻初花よりも珍らしく、岸の山吹咲亂れ、八重立つ雲の絶間より、山郭公の一聲も、君の御幸を待ちがほなり。法皇是を叡覽あつてかうぞ思召しつづけらる。

池水にみぎはの櫻ちりしきて波の花こそさかりなりけれ。

舊りにける岩の絶間より、落ちくる水の音さへ、故びよしある處なり。綠蘿の垣、翠黛の山、繪に書くとも筆も及び難し。女院の御庵室を御覽あれば、軒には蔦朝顔這ひかゝり、しのぶ交りの忘草、瓢箪屢、空し、草顔淵が巷に滋し、藜藿深く鎖せり、雨原憲が樞を濕す。ともいひつべし。杉の茸目もまばらにて、時雨も、霜も、おく露も、洩る

瓢箪……  
橋直幹の申  
文中の語  
朗詠の句

月影に争ひて、たまるべしとも見えざりけり。後ろは山、前は野べ、いざさ小笹に風さわぎ、世に立たぬ身の習とて、憂き節しげき竹柱、都の方の言傳は間遠に結へるませ垣や、わづかに言とふものとは、峰に木傳ふ猿の聲、賤が爪木の斧の音、これらが音信ならでは、まさきのかづら青かづら、くる人稀なる處なり。

法皇、人やある、人やある。と召されけれども、おいらへ申す者もなし。遙かにありて老い衰へたる尼一人参りたり。女院はいづくへ御幸なりぬるぞ。と仰せければ、この上の山へ花摘に入らせ給ひて候。と申す。さやうの事に仕へ奉るべき人もなきにや。さこそ世を捨つる御身といひながら、御痛はしうこそ。と仰せければ、この尼申しけるは、五戒十善の御果報盡きさせ給ふによりて、今かゝる御目を御覽するにこそ候へ。捨身の行に、なじかは御身ををしま

せ給ふべき。因果經には、欲知過去因見其現在果、欲知未來果見其現在因と説かれたり。過去未來の因果を覺らせ給ひなば、つやつや御歎あるべからず。悉達太子は十九にて、伽耶城を出で、檀特山の麓にて、木葉をつらねて肌をかくし、嶺に上りて薪を採り、谷に下りて水を掬ひ、難行苦行の功によつて、遂に成等正覺し給ひき。とぞ申しける。この尼の有様を御覽ずれば、絹布のわきも見えぬものを、結び集めてぞ着たりける。「あの有様にてもかやうのこと申す不思議さよ。」とおぼしめして、「抑汝は如何なるものぞ。」と仰せければ、さめくと泣いて、しばしは御返事にも及ばず。やゝあつて涙をおさへて、申しけるは、申すにつけても、憚り覺え候へども、故少納言入道信西しんせいが女阿波の内侍と申すものにて候なり。母は紀伊の二位。さしも御いとほしみ深うこそ候ひしに、御覽じ忘れさせ給ふ

紀伊二位  
信西の妻  
名は朝子  
紀伊守範元  
の女

につけても、身の衰へぬるほども、思ひ知られて、今更せん方なうこそ覺え候へ。とて、袖を顔に押しあてて、忍びあへぬさま、目も當てられず。法皇ほうわうげにも、汝は阿波の内侍にこそあんなれ。今更御覽じ忘れける。只夢とのみこそ思召せ。とて御涙せきあへさせたまはず。供奉の公卿殿上人も、不思議の尼かなと思ひたれば、理にてありける。とぞ各感じあはれける。

此方彼方を觀覽あれば、庭の千種露重く、籬にたふれかゝりつゝ、そともの小田も水越えて、鳴立つひまも見えわかず、御庵室へ入らせ給ひて、障子をひきあけて、御覽ずれば、一間には來迎の三尊おはします。中尊の御手には、五色の絲を懸けられたり。左には普賢の畫像、右には善導和尚ぜんどう竝に先帝の御影をかけ、八軸の妙文、九帖の御書も置かれたり。蘭麝の匂にひきかへて、香の煙ぞ立ちのぼる。

善導  
唐の高僧  
八軸の妙文  
法華經  
九帖の御書  
善導の觀無  
量壽經の疏

浄名居士  
 維摩詰のこ  
 と釋迦と同  
 時代の人、  
 定基法師  
 長保四年  
 (一六六二)  
 入宋  
 法名寂昭  
 長元七年  
 (一六九四)  
 宋に寂す

かの浄名居士の方丈の室の内に、三萬二千の床をならべ、十方の諸佛を請じ奉りけんも、かくやとぞ覺えける。障子には諸經の要文ども色紙に書いて押されたり。其の中に、大江の定基法師が清涼山にして詠じたりけん、笙歌遙聞孤雲上、聖衆來迎落日前とも書かれたり。少しひきのけて、女院の御製とおぼしくて、思ひきやみ山の奥にすまゐりて雲居の月をよそに見んとは。さて傍を御覽ずれば、御寢所と思しくて、竹の御竿に、麻の御衣、紙の衾など懸けられたり。さしも本朝漢土の妙なる類、數を盡して、綾羅錦繡の粧も、さながら夢になりけり。供奉の公卿殿上人も、各見參らせし事なれば、今のやうに覺えて、皆袖をぞ絞られける。さる程に、上の山より濃き墨染の衣着たる尼二人、岩のかけぢを傳ひつゝ、おり煩ひ給ひけり。法皇是を御覽じて、あれは何者ぞ。と

大納言典侍  
 平重衡の室

御尋あれば、老尼涙を抑へて申しけるは、花筐臂にかけ、岩躑躅取具して持たせたまひて候は、女院にて渡らせたまひ候なり。爪木に蕨折具して候は、鳥飼の中納言維實の女、五條大納言國綱卿の養子、先帝の御乳母、大納言典侍と申しもあへず泣きけり。法皇も世に哀れげにおぼしめして御涙せきあへさせたまはず。女院はさこそ世を捨つる御身といひながら、今かゝる有様を見えまゐらせんずらんはづかしさよ。消えも失せばやと思召せどもかひぞなき。宵々ごとの鬨伽の水、むすぶ袂もしをるゝに、曉起きの袖の上、山路の露もしげくして、しぼりやかねさせたまひけん、山へも歸らせたまはず、御庵室へも入らせおはしまさず、御涙にむせばせ給ひ、あきて立てせましゝたるところに、内侍の尼まゐりつゝ、花筐をばたまはりけり。

「世を厭ふ習、何かは苦しう候うべき。早々御對面候て、還御なし  
参らさせ候へ。」と申しければ、女院御庵室に入らせ給ふ。「一念の窓  
の前には攝取の光明を期し、十念の柴の樞には聖衆の來迎をこそ  
待ちつるに、思の外の御幸なりける不思議さよ。」とて泣くく御見  
参ありけり。(平家物語)

藤代禎輔

文學博士

前京都帝國

大學教授

ワイマール

ドイツ中

Weimar

部の都市

瀧の川

東京の北瀧

野川町にあ

る

九 ワイマールより

藤代 禎 輔

ワイマールは小さき都にて、山水の景勝に富めるにも無  
之候へども、如何にも閑靜にて人氣良く、誠に居心地よき  
處に候。公園にて森の繁れる中をルイムと云ふ瀧の川  
位の流ちよろく致し居り、其の上には、鐵の欄干に石柱  
と云ふ嚴しきものも有れど、又丸太を組合せて架けし風

Schiller シルレル (1759—1805)  
Goethe ゲーテ (1749—1832)  
詩の大イにと  
人ッドも



流なる橋もありて、シルレルの腰掛、ゲーテの休息小屋な  
ど、何れも昔通り保存せられて、古を偲ばしむる跡は到る  
處に散在致し、一々委しく點検して、詩作との關係など取  
調べ候はば、餘程興味ある事ならんが、短日月の滞在にて  
はそれも出來かね候。通り一遍の旅客として、目に觸れ

候處を御報告  
申上候。

今日第一番  
に足を運びた  
るは圖書館に  
て案内者の言  
葉によれば、カ

カール、アウグスト  
Karl August  
(1757—1823)

トリッペル  
Trippel  
(1744—1793)  
ダンネッケル  
Dannecker  
(1753—1841)

ール、アウグスト太公が露國の大賓某に向ひてワイマール第一の名物と紹介せる處なりとか。初はゲーテが我が書齋にとて自ら設計したる建築物なる由、珍書奇籍も夥しき事なるが、ゲーテ・シルレル始め、其の他有名なる人物の彫像肖像畫など、貴重品の數々ありて、今迄文學史の挿畫にて纔かに其の倂を偲びたる名作の實物に接し、トリッペルが靈腕に彫まれたるアポロ其の儘との評あるゲーテの大理石像、ダンネッケルが妙技を揮ひしシルレルの半身像など、凝然見惚れて案内者に急きたてられ、不承々々歩を移すと云ふ始末、儘になるなら、何時迄も此の地に居て、朝夕此等の逸品を眺めたしとの念も起り候。圖書館を出でてシルレルの住宅をおとづれ候。表よ

りの見附きは、とても立派と云ふ建物には無之候へども、窓の板戸の綠色に塗立てある様など、何となくゆかしき



ワイマール記念像  
テ・グ(左) ルレルシ(右)てひ向

心地せられ、中に入りて、一階二階は梯子段を見しばかり、三階に至りて、シルレルの應接室書齋臨終室を一覽致し

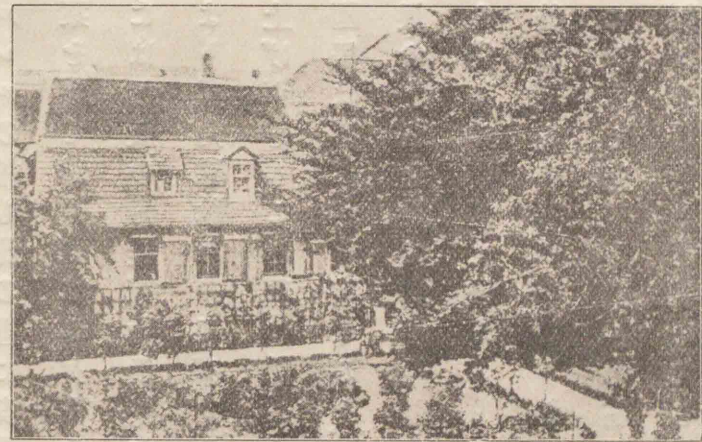
候。一切の裝飾品を取除けて、詩聖が使ひ慣れし文房具、椅子、寢臺、掛額等を据附けあるばかりなれば、至つて質素に候へども、此の内に寢食して、晩年の傑作を産み出せし現場と思へば、感慨限りなき次第、腐れ林檎の香を嗅ぎて、深更まで意匠を凝したるは、此の机の前にやあらん。嗅煙草に睡魔を驅りて、神來の筆を馳せたるは、此の窓上ならんなど、詩人ならぬ我も空想の天地に身を置きて、案内者の饒舌も耳に入らばこそ。臨終室を見るに及びて、其の餘りに狹隘なるに驚き、かゝる偉人が此のむさくろしき部屋にて息を引取りたるかと、坐ろ暗涙に咽び候。

此處を立出で、國君の墳墓に詣で候。是はワイマール代々の君主が遺骸を納むる圓天井の石室にて、ゲーテ・シ

ルレルの棺も此の裡に安置有之、木棺の上部は月桂樹の葉を以て堆く蔽はれ、ゲーテの頭部には金製シルレルのには銀製の月桂冠を供へたり。兩詩人の優劣は存命中より兎角議論ありて、ゲーテ自身も、強ひて一人に團扇を上げずとも、これ程の詩人を二人まで出したりと、ドイツ國民は喜ぶべき筈なるを、と云ひたる位なるが、今此の金銀の差別を見て、勿論兩詩人の地位、若しくは其の長逝せる當時の事情に依ることは承知しながら、シルレルは死後に至るまで薄倅なりとの感を起し候。併し身を布衣に起して、王者と同一の石館内に遺屍を納めらるゝは、比類なき名譽と感嘆いたし候。

これよりゲーテの住宅に赴きしが、流石宰相の地位に

ありて、當代に時めきし詩人の事として、シルレルの居宅な



ゲテの住宅

どとは比較すべくもなき程大なるものなれど、現今の程度より云へば、極めて質樸にて、是將案外の感に打たれ候。ゲテの寢室に入りて、シルレルが臨終の際、ゲテも病に就き居りしかば、家人はシルレルの死を告げなば病氣に障りなんとて祕しけれど、素振りに悟りて、其の實を察

イエナ  
ワイマールの東方  
Jena  
ウルツブルグ  
ワイマールの西南  
ドイツ聯邦  
Wülzburg  
ヤバリア  
ヤ王国の首都

厨川白村  
名は辰夫  
文學博士  
京都帝國大學教授  
大正十二年  
歿  
年四十四

し、潜然流涕したりとの一事を思ひうかぶれば、兩詩聖の交情は、東西古今に例なき美事なりと感涙禁め難かりき。庭園に面せる一室に、シルレルの頭蓋骨を手にせるゲテの半身像を見、ゲテが此の彫刻に現れたる想をうたひたる詩を思ひ出でて、感一層深かりき。

ワイマールも一通り相濟みたれば、明日此の地を發足致し、イエナを経てウルツブルグに赴くつもり、行く先々の模様はおひく御通知可申上候。(帝國文學)

一〇 藝術の表現

厨川白村

世間の人は繪を見ても、又文章を見ても、あんなものは實際にありはしないと云ふことをよく申します。



昔から繪空事と云ふ言葉が出来て居ります。即ち繪は嘘を描くものだと言ふやうに相場が極つてゐます。即ちあんな長い手はありはしない。あの花は瓣が六つの筈であるが、あれは八つに描いてあるから嘘だ。」と云ふやうな事を申して畫を批評する人があります。是は藝術の何たるかを了解しない世間普通の素人に一番よくある事で、つまり藝術と云ふものは嘘を描くものだと言ふのです。藝術家の中にも、さう云ふ事を思つて居る人があるらしいが、科學萬能を信じて居る人たちが、よくさういふ事を言ひます。或植物學者が展覽會の繪を見て、一々片端から、あの木の葉は彼處が間違つてゐる、此方の花の莖はあれは本當でない。」と云ふやうなことを言つて、批評して居つたのを見た事がありますが、是はまた御苦勞千萬な餘計な詮議だ、だと思ひました。



ロダン

これに就いては、佛蘭西のロダンの傳記の中にも次のやうな有名な話があります。或南米の金持が、ロダンに彫刻を依頼して肖像を造つて貰つた。所がちつとも似てゐないと云つて、ロダンにそれを返してしまつたと云ふ事です。ロダンは言ふまでもなく世界に於ける近代の大藝術家である。其の人の作つた作品が、全くの素人の眼には、實物に似て居らぬからと云つて落第してしまつた。かう云ふことは何を語つて居るのでせう。

若し唯外面的に或事象を寫すと云ふことが藝術の本意であるならば、安物の寫眞の引伸しを使つて置けばよいのです。藝術家が自分の心血を注いだ風景畫よりは、地圖と寫眞を置いた方がずつと宜いわけです。人の顔を見て、其の恰好を似せて描くと云ふことは安つぽい未熟な畫師にでも出来ることです。そんな事は堂々たる大藝術家の手腕を俟たないでも出来るのです。若し眞の藝術家に向つて、似せて描いて下さいと注文したならば、實物の形を似せる位の繪ならば、お易い御用だと云ふでせう。其の代り自己の本心や、自己の技倆や、藝術的良心に訴へて、寫眞屋の下働き見たやうなことはしないと云つて、お斷りするに違ひないのです。そこで、それなら藝術はやはり嘘を描くのか、文章でも或は繪でも、あれは皆出鱈目を描くのかといふお尋ねが出るかも知れませ

シミリー  
の修辭學上  
の語  
直喻、明  
の義  
の義

んが、藝術は飽くまで眞を描くに相違ない。繪の事は、私が口先や手眞似で一寸言ふ譯には行きませぬが、文章の事に就いて申しますと、櫻花の爛漫たるを見て、あれは雲か霞かと云ふやうな事を申します。さうして實際雲のやうな、或は遠山霞の様なものを描いて、満朶の櫻の咲亂れてゐる處だと云つてゐます。確かに嘘だ。所が顯微鏡で櫻の花を調べたものよりも、花の雲の方が本當の感じ、本當の眞を現してゐる。一々櫻の瓣を描いたよりも、吾々には、雲か霞かばつと淡墨でも流して置いてくれる方が眞であり、誰にも眞である。譬へば人相書でも、あの人の鼻はずつと上から降りて来て、前の方へ何時つき出てゐると云ふことを記述するよりは、彼の人の鼻は尺八に似て居ると言つた方が、藝術的表現を與へて居る。尺八のやうなと云ふ文章で申しますれば一のシミリーを

白髮三千丈  
白髮三千丈  
綠愁如箇  
長不<sub>レ</sub>知明  
鏡裏何處得  
秋霜  
(李白)

使つてある爲に其の眞が活きて現れてゐます。古來支那人は非常に誇張が上手で、兵隊が一萬も居らうものなら百萬の大軍と言つてしまふ。支那の軍記物などには實にこれがうまく書いてあります。つまり嘘です。法螺は嘘の一種ですが、白髮三千丈と言つて人を馬鹿にして居る。三千丈は愚實は一尺もありはしない。ところが三千丈と言ふことを聞くと、大袈裟ではあるが、如何にも長く垂れた白髮のやうな氣分がします。

嘘であるかも知れないが、それが十分に或意味の眞を私どもに傳へてゐます。そこで詭辯を弄するやうでありませんが、眞といふものに二種あると、かう申すより外はないと思ひます。即ち第一は、鳥口や定規を使つて描いたやうなもの、寫眞に寫すところの眞、あれは吾々の理智の方面、或は客觀的、或は科學などから見た考へ

方で、即ち一遍私どもの頭の中で理窟をこねて判斷して見る、或は解剖して見る。例へば彼處に花のやうな物がある。それを吾々がちよいと見た刹那の印象でもなければ、感情でもなく、あの花は何だ、櫻か何だと云つて研究して見る。即ち語を換へて言へば、其の物を分析し解剖して見て、始めて吾々は其の科學的の眞を掴み得るのです。即ち吾々の理智作用を主にして表現する。

終には蟲眼鏡或は顯微鏡を使つて、美しい物までも汚い物にしてしまつて見なければ氣が濟まぬ。それでなければ眞でない。藝術家は嘘八百を言ふものだと言つてしまふ方です。さういふ人々は、つまり一方にばかり頭が働くのでありますが、かういふ意味の眞を名付けて科學的眞とでも申して置きませうか。即ち吾の直覺で感じた所の眞ではなくして、一遍其の物を殺して、さう

して解剖して頭の中でぐる／＼と廻して見て理窟をこねるので  
す。譬へば水と云ふものは、行く川の流とか、甘露のやうな水とか  
言へば誰の頭にでも端的に初めから藝術的にはつと現れる。と  
ころが科學者は水と云ふものをH<sub>2</sub>Oと解剖して、それでなければ  
眞でない、そんな甘露のやうな水などはありはしない、其のなかに  
は黴菌が澤山居るに違ひないと言ふのです。極度に科學的精神  
に支配された頭になると、どうしてもそれでなければ承知が出来  
ないのです。

それから先程申しました白髮三千丈式の眞を名付けて、私は藝  
術上の眞だと申します。即ち眞であると云ふ點に於ては、前者と  
肩を並べて少しも劣りません。決して嘘は言つてゐない、飽くま  
でも眞であります。即ち白髮三千丈といふのは白髮何尺何寸と

いふのと同じだけ眞である。是は私どもの感じ、即ち吾々の直感  
作用に訴へるのであつて、三段論法流の理窟や、解剖や分析の作用  
によらないで、端的に吾々の腦裡に眞を閃めかすといふことに依  
つて表現としての眞と言ふ意味があるのです。理窟など言つた  
ら、もう打壞しです。下手な歌詠みは理窟や説明をならべて、それ  
で歌になつてゐる積りでゐる者がありますが、あれは本當に藝術  
にならないぬたと云ふものです。

吾々の直感の作用、或は感じです、感情でも宜しい、それが端的に  
白髮三千丈と言つたり、あの人の鼻は尺八のやうだと言はれてび  
かりと吾々の頭の中に何物をか閃めかすことが出来れば、それは  
表現としての眞を立派に寫して居るのです。(象牙の塔を出でて)

岡倉覺三  
美術鑑賞家  
大正二年歿  
年五十二

一一 狩野芳崖

岡倉覺三

一幅の濃淡、人天相分る。上は則ち無量光明の淨界なり、下は則ち五欲昏迷の穢土なり。大士の容顔端嚴にして、愁に和して微笑を含み、左手に楊柳を撚し、右手に寶瓶を傾け、瀉ぎ來る無明空中一滴慈悲の水は、清魂の人間に歸るを送るものなり。赤子の合掌して仰いで菩薩を見るものは、無知清淨にして餘念を懷かず。亂山突兀、暮雲暗澹、煙冷かに風荒る。憐むべし、呱呱たる阿孺何處にか墜下し去りて、憂悲煩惱の長夜に迷ひ、那邊の淨地に向つて如意心蓮を發き、再び慈悲の海に遡るを得ん。嗚呼、是芳崖狩野翁が畢生の傑作觀音大士の像なり。

翁嘗て人に語つて曰く、人生の慈悲は母の子を愛するに若くはなし。觀音は理想的の母なり、萬物を發生煦育する大慈悲の精神なり、創造化育の本因なり。余此の意象を描かんと欲する、ここに



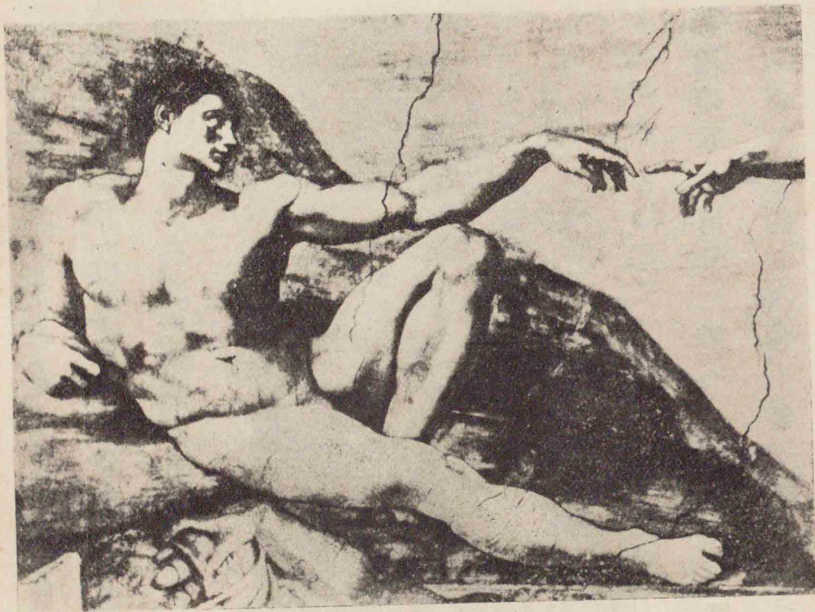
狩野芳崖筆慈母觀音圖

年あり。未だ適當なる形相を得ず。

此の圖は翁が最終の揮毫に係り、長逝に先だつこと纔かに四日、畫き了へて、未だ款を署するに至らざりしものなり。蓋し翁平生

Michael Angelo  
1475-1564  
ミケランジェロ  
伊太利の畫彫家  
詩人の刻家

の心事此の一幅畫中に留存するものあらん。其の筆墨の沈著淳厚にして、其の賦色の明麗渾融なるは、近世多く比類を見ず。特に意匠の高尙秀絶なるに至りては、技道に進むものにして、遙かに古人を凌駕せんとす。尋常一様墨を玩び筆を弄し、花天月地に風流三昧を事とするものと時を同じうして語るべからず。彼のミケランジェロの畫きたる創造の圖は、歐洲美術の神品と稱すべく、氣力豪邁にして、布置雄大、唯見る雲間の上帝隻手を伸して大地を指し、倏忽一個の壯士の現出するを。彼は則ち上帝の命令念力を以て人を創造するなり。是は則ち觀音の慈悲法力を以て人を發育擁護するなり。佛家發生の深理は自ら基督教造物の主旨と異なる所あり。其の美術上の形相も、亦隨つて同じからず。人若し畫中の心情を看破し去らば、豈妙悟の天外より落つるなからんや。憐



ミケランジェロの創作

むべし、此の超凡の絶技を抱きたる人は、未だ天下の名を成すあたはずして、空しく黄泉の客となれり。しかれども翁の妙想はつひにミケランジェロをして美を擅にせしめざりしなり。

翁姓は狩野、文政十一年正月十三日、長州に生る。幼名幸太郎。父を晴皐と曰ふ。家世萩藩の畫師た

り。父性豪毅にして俠氣あり。自ら信ずること頗る固く、其の子を訓ふること甚だ嚴正なり。翁が勇邁果敢の氣力は多く嚴君の鍛鍊による。母溫柔貞淑、其の愛育慈養は翁の常に追念したる所



雪山舟筆山水

にして、後年觀音の畫ある所以も亦此に基づく所あるべし。翁の豪懷英氣、風雲を叱咤する筆を以て、時として情致纏綿、曉露の海棠に墜つるが如き、一種幽婉の變體あらしめたるも亦故ありと謂ふべし。年十九にして始めて江戸に來り、木挽町狩

周文 室町時代の畫僧 京都の相國寺の住

玉潤 支那南宋の畫僧

夏明遠 支那南宋の畫僧

仇英 支那明代の畫家

雪舟 室町時代の畫僧

馬遠 支那南宋の畫家

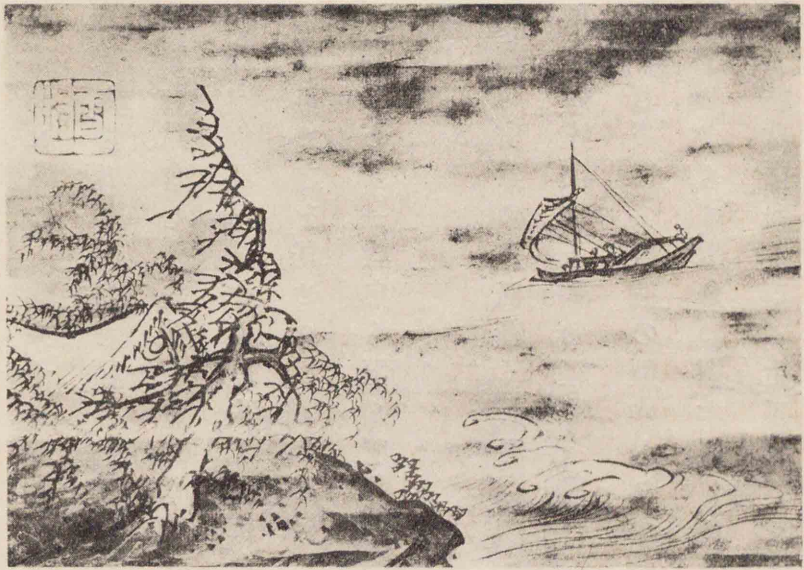
夏珪 南宋の畫家

相阿彌 室町時代の畫家

野畫所に入る。爾來十有餘年、螢雪の功を積み、狩野門流の正格を鍊磨し、非凡の精妙を顯し、當時祕訣と稱したる師門の口傳の如きも、暗合默會して先輩を驚かし、巍然として畫所屈指の名手たり。安政六年江戸城本丸焼失す。再建に當り、大廣間天井の裝飾は翁選ばれて之を託せらる。然れども翁の心は未だ大いに安んぜざるものあり、一朝自ら悟る所ありて、遂に別天地を開かんとするに至れり。

當時狩野の畫風漸く衰微に瀕し、粉本摸寫の弊最も盛んにして、周文の遠山に玉潤の雁陣を横たへ、夏明遠の樓閣に仇英の人物を坐せしめ、以て自個の製作となすものあり。當時の一幅の丹青を解剖し去らば、雪舟の樹木巖石、馬遠の蘆荻、夏珪の牧牛、相阿彌の歸帆を點點排列するに過ぎず、畫家の新案に係るものは纔かに雲烟

雪村  
室町末期の  
畫僧



雪 村 筆

と落款とのみ。翁の洞然大  
觀して自ら破格を企てたる  
は洵に已むを得ざりしなり。  
一日童子あり、戯に虎を畫  
く。眼は是兩々の丸子、耳は  
是雙々の遠山、足は是四竿の  
老竹、斑文五六點、鬚毛兩三絲、  
添ふるに長大の尾を以てす。  
翁觀て大いに喜び起舞して  
歎じて曰く、是なる哉、是なる  
哉。雪舟の骨、雪村の氣、亦之  
に外ならず。畫の要は一意

直到、唯心裏の影を以て紙上の形となすに在り。意盡くる所は則ち筆の盡くる所なり。氣力満盈の間、豈一點の間筆を着くべけんや。是よりして筆墨を童子に與へ、白紙を以て其の畫く所に換へ、之を祕笈に藏し、夜靜かに人定まる後、孤燈を剪つて之を展覽し、畫中の上乘禪に悟入する所あり。此の時に於て翁の心事を解し、共に破格を期したるは、獨り橋本雅邦なりき。氏は翁と同日畫所に入る。時に年十三歳なりと云ふ。此の兩畫伯、一は雄拔奇豪、一は渾厚着實、共に表裏提挈し、新畫の端緒を開きたるは、亦奇縁といふべし。

心機漸く熟して、形相未だ成らず、新に生面を開きたる者の通弊として、忽ちにして奇癖に陥り、怪詭百出、滿幅の風雲魑魅魍魎を奔らせて、同門の嘲を招き、師家の罵に遭ひぬ。されど、翁自ら信ずる



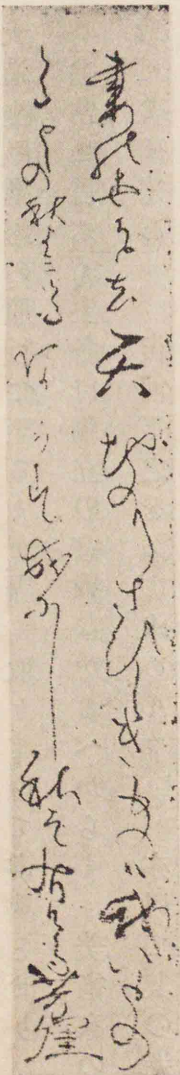
所あり、敢へて一步を退かざりき。憾むらくは世を擧つて俗陋、翁を知る者甚だ罕なり。慘憺辛苦嘗めざるなく、其の死に先だつこと兩三年、始めて其の心機と形相と調和するを得て、畫法の自在を成したる者の如し。觀音其の他の傑作に至つては、畫格遠く古大家に入り、人をして驚絶せしむるに足ると雖も、其の巧妙は既成の形相に非ずして、寧ろ含蓄にあり、未敷蓮華の香を包み、秋雲の雷電を藏するが如し。惜しいかな、未だ大いに其の圓熟縱横の妙を揮ふに及ばずして遂に逝けり。享年六十一、時に明治二十一年十一月五日なり。

勝川  
狩野勝川  
院雅信

翁人となり、内、忠實溫順にして、外、高邁俊逸なり。其の父母に至孝なるは郷閭の知る所にして、勝川門下に遊學したる時の如きは、一身節儉を守り、潤筆を得ても之を私せず、郷里に送り、以て父母且

夕の料に供したりと云ふ。技藝の上に在りては、虚心坦懷好んで人に問ひ、門下子弟の説と雖も、苟も取るべきあれば、喜び拜して之を容れ、其の圖様を改むること屢なり。自ら信じたる所を説くに至つては、貴賤親疎の別なく、長談雄辯して必ず意を盡さざれば歇まず。

妻の世を去  
けるとしの  
秋よみける  
天地にさびし  
きものは我  
ものあらず成  
にし秋にぞ有  
ける  
芳崖



蹟筆 崖 芳

翁又謠曲を愛し、舞を好む。常に舞法の畫法と同一なる所以を説き、得意の事、得意の人に遇へば、婆娑として起舞し、旁に人なきが若し。蓋し畫伯眼中唯畫あるのみ。顧ふに美術の大家たるものは自ら一家の美學を有するものなり。或は心に感じて口に之を

云ふ能はざるものあり。或は默契して言ふを好まざるものあり。翁の如きは之を言ふを喜びたるものなり。翁は畫理を以て天地萬物の眞理を發見せんと試み、佛家禪僧の妙悟、漢儒西哲の深旨、總べて丹青鏡裏に照映して其の意義を判じ、得失を論じ、仁義道德の大道、坐臥進退の庸行に至るまで、盡く取りて以て畫訣とせり。翁常に言ふ、「人生各自獨立の宗教なかるべからず。美術家の宗教に美術宗あり。復何ぞ之を他に求めんや」と。亦以て其の造詣を見るに足るべし。(國華)

一二 汽車に乗りて

上田 敏

赤松の林をあとに、麻畠左に見つつ、  
汽車は今堤にかかる。

上田敏  
文學博士  
大正五年  
歿年四十四

ほのかなる水のにほひに、河淀の近きはしるし。

三稜草生ふる河原に、行々子はけけしと噪ぎ、

鶺鴒くもこそ夏は來らね、たま／＼に百舌の速賢はやたか。

篋鷺の何をか思ふしよんぼりと立てる暇に、

紡績の宿にやあらん、きりはたり、はたり、ちやう、ちやう。

箬の音ややに隔たり、道祖神祭るあたりの

鐵道の踏切近く、繩帶のつづれの衣、

勝色は飾磨かざりの染の

乳呑子を負へる少女は淺茅生の末黒すゝくろに立ちて、

萬歳とはやし送りぬ。

萬歳はなれにこそあれ。  
 幾とせを生きよ、里の子。  
 人の世に尊きものは  
 土の香ぞ、國の御魂ぞ。  
 偽の市いちに住まへば、  
 産土の神にさかりて、  
 養をかきたる人も、  
 埴安の郷の土より  
 生えぬきのなれに呼ばれて、  
 本然の命にかへる。

蘇門答刺  
香木の名

高山樗牛  
 名は林次郎  
 文學博士  
 明治三十五  
 年歿  
 年三十二

道芝の上吹く風よ、農人の寢覺に通ふ。  
 微かなる土のおとづれ、なつかしき母の聲音か。  
 晝さがり草の香高く、松脂しょうじのほひもまじる  
 地の胸の乳房のかをり、蘇門答刺すまんだらの香も及ばじ。

忽ちに鐵のほひす。

鳴る神の落ちかゝるごと、汽車は今橋に轟く。

桁構げたかま目路めぢをかぎりて、ひとり見る蛇籠へびかごの磔はりつけ。

(上田敏詩集)

一三 世界の四聖

高山樗牛

生れて一代の宗師となり、死して百世の儀表となる。聖人に非

ずんば誰かこれを能くせんや。釋迦孔子ソクラテス基督の四人、世呼んで世界の四聖と稱す、宜なるかな。

釋迦は西曆紀元前凡そ六百年の頃、印度迦毘羅國の王家に生る。父は淨飯王、母は摩耶夫人、其の本名を悉達多といふ。釋迦は迦毘羅王家の族名にして、佛陀は其の出家成道せる後の尊號なり。釋迦、身は一國の太子に生れけれども、夙に思を人生の問題に潜め、二十九の歳、其の妻子を捨てて王城を逃れ、山林に隠れて道を修むること六年、終に人生の奧義を極め、無上の正覺に徹底せり。爾來十餘年の



高橋山樗



釋迦 (吳道子筆)

間北天竺の各地に巡錫して教化を布き、年八十餘歳にして跋提河の邊に歿しぬ。今の佛教は即ち釋迦一代の教訓に基づく。蓋し釋迦の當時、印度には幾多の哲學ありき。されど徒らに思索の高遠を欽びて、人生の疑問に適切ならず、偏に幽玄なる談理と慘憺たる苦行とによりて安心の道を求めたり。其の流派を樹てて相争ふ所は、畢竟名目上の優劣のみ、未だ一世の元々をして、歸命の大道に就かしむるに足らず。釋迦この間に生れ、其の浩大なる慈悲と無邊なる智慧とを以て一世の木鐸となり、民をして其の歸依する所を知らしめたり。

孔子名は丘、孔子は其の尊稱なり。今を去る二千一百餘年の昔、支那の魯國に生る。幼にして學を好み、禮を習ふ。壯年の頃より魯國の官吏となり、傍ら子弟を教へて、夙に令聞あり、學徳愈進む。魯の定公の時に至り擢んでられて大司寇の職に就く。治績大いに舉り、内外其の風采を想望す。



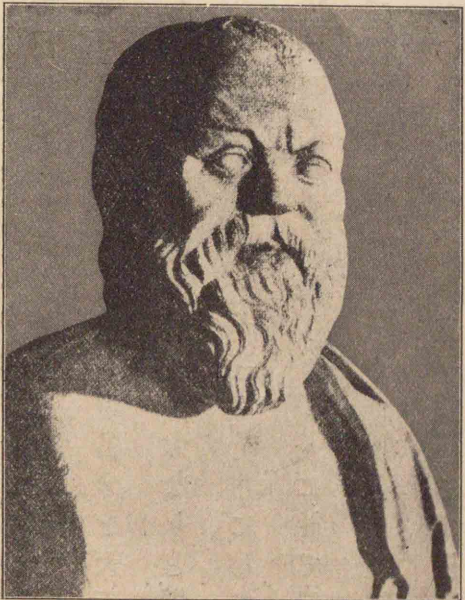
孔子 (吳道子筆)

時に齊王、魯國の日に盛大におもむけるを嫉み、謀を構へ、定公をして孔子を用ひざらしむ。孔子時運の非なるを見、五十六歳の老軀を挺し、門下の高足を率ゐて四方に遊説を試みぬ。當時の支那は謂はゆる春秋戰國の亂世なり。周の王室は名のみにして、君臣の大義は蕩然として地を掃へり。或は臣にして其の君を

弑するものあり、子にして其の親を害するものあり、強は弱を食み、大は小を併せ、權力の外に道義あるなし。教化の陵夷、風俗の頹廢未だ曾てこの時の如きはあらず。孔子既に志を魯に得ず、乃ち慨然として故國を出で、大義名分を天下に唱へて、狂瀾を既倒に廻さんとす。その志や高且つ大なりと謂ふべし。かくの如くして四方を漂浪すること十三年、時非にして道容れられず、世また耳を名教に傾くるものなし。こゝに於て已むを得ず、老脚蹉跎として再び魯に歸り、歎じて曰く、嗚呼、吾が道終に窮せり。世終に吾を知るものなきか。と。門弟子貢慰めて曰く、何ぞ夫子を知るものなからんや。孔子曰く、天を怨みず、人を尤めず、下學して上達す。吾を知るものはそれ天か。君子は歿して名の稱せられざるを病む。吾が道行はれずんば、吾何を以てか後世に見えんや。と。幾ばくもな

く歿しぬ。時に年七十三。

ソクラテスは希臘のアテネ府に住める一彫刻師の子なり。其の生れしは凡そ紀元前四百七十年の頃にして、釋迦孔子と年を隔



ソクラテス

つること二三十年に過ぎず。東西の聖人殆ど時を同じうして世に出でたるは奇なりといふべし。希臘の當時は所謂詭辯學派の跋扈せし時代にして、智識は名目の争に留り、道徳は空文の上のみ貴ばれたり。其の状なほ釋迦當時の印度の如く、人生社會の實際に關しては殆ど裨益するところ無かりき。ソ

クラテス慨然として時弊の救済を以て自ら任じ、盛んに道を講じ、理を論じ、諄々として倦まず、詭辯學派の輩に遇へば、則ち其の獨得の論法を以て辯難攻撃して一步も假借せず、侃諤の正義、其の稀代の雄辯と相伴ひて一世を風靡せり。然るに、喬木は風に折らるるの喩に漏れず、群小のソクラテスに快からざるもの相謀りて、國法に背けるものとしてソクラテスを讒訴せり。其の訴狀に曰く、ソクラテスは國教を信ぜずして異教を翫め、以て人心を惑亂せり。國法によりて死刑に處すべし」と。ソクラテスが、この讒訴に對する抗議は、實に壯快を極めたるものにして、慨世憂國の至誠を以て國民に訴ふるところ、語々百世の眞理ならざるはなし。然れども、判官はソクラテスを以て傲岸不遜なりとし、死刑を宣告せり。ソクラテス慨然として驚かず、曰く「命のみ」と。其の獄中にあるや、常

に其の門弟子を集めて生死、靈魂未來の事を説き、人の脱獄を勧むる者に對しては、輒ち答へて曰く、「予は唯正義に導かれんのみ。死また何するものぞ。人生の幸福は靈魂の上にとありと知らずや」と。終に従容として毒を仰いで歿しぬ。將に歿せんとするや、弟子遺書を求む。ソクラテス曰く、「爾一雞を以てアスクレピヤスの神に捧げよ」と。蓋し曾て病みし時、平癒を祈りて謝を致すことを忘れしなり。希臘の聖人ソクラテスはかくの如くにして逝きぬ。年七十。

基督は本名を耶穌といふ。基督とは膏灌がれたる者といふ義にして、教徒の奉りたる尊稱なり。猶太のベトレヘムに生る。西曆紀元第一年は其の生後四年に當れり。父はヨゼフと呼べる賤しき木匠にして、母の名をマリヤといふ。長じて三十歳の頃豫言



者ヨハネの洗禮を受けて、始めて傳道の生涯に入り、爾來三年の間猶太の各地を歴游し、諸の迫害に屈せずして其の福音を傳へたり。當時羅馬帝國は榮華已に其の極に達し、禍亂の萌芽其の中に胚胎し、災異荐りに到りて天下寧日なし。殊に基督の故國たる猶太は久しく暴君收斂に疲れ、異邦人の侮慢を被れり。民衆は徒らに珍奇の淫祠を崇拜して益放縱の俗に流れ、學者は詭辯を弄びて空しく人を惑はすのみ。是に於て一

世の人心は缺焉として偉人の現出してこの暗黒の社會を照破せんことを渴望せり。基督この間に生れ、自ら救世の使命を負へる

神の子なりと稱し、昂然として其の偉大なる新教理を宣傳せり。遠近靡然としてこれに赴く。僧侶學者官吏等これを喜ばず、猥に新法異説を唱へて民を惑はすものなりとなし、基督を捕へて磔殺の刑に處す。基督豫め此の事あらんことを慮り、晏然として騒がず、靜かに祈りて曰く、「神よ、彼等を赦せ。彼等は其の爲すべき所を知らざればなり。」と。其の刑場に赴くや、路傍に哀哭する女子を顧みて曰く、「イェルサレムの女子よ、我が爲に哭くなかれ。唯己と己の子の爲に哭け。」と。かくの如くして、基督は三十三年を一期として、十字架上の露と消え去りぬ。基督死して後、其の弟子等は激烈なる迫害に抵抗して、其の教を天下に弘めぬ。基督教即ち是なり。以上は四聖の略傳なり。其の人物事蹟の高大にして雄偉なる永く後人の景慕し、崇拜すべき所なり。而して、四聖の中釋迦を除

きては、いづれも轆軻不遇の間に其の生を終へたり。孔子は志を四方に得ず、其の經綸を抱いて空しく詠歎の間に歿せり。ソクラテスと基督とはいづれも讒人の手に罹り、或は毒を仰ぎ、或は盜賊と並びて十字架上に釘殺せられたり。慘憺たりと謂ふべし。然れども是等の人々の志す所は天下後世にあり。現世の禍福と一身の安危とは毫も其の顧慮する所にあらず、故に其の死に就くや、晏如として恰も歸するが如し。孔子は其の一身の不幸を憂へずして、却つて「わが道行はれずんば、吾何を以てか後世に見えんや。」と嗟歎せり。釋迦は衆生のために其の妻子と王位とを抛ちて、路傍に乞へり。ソクラテスは死罪の脅迫に遇うて揚言して曰く、「正義を信ずるものに取りて、死はた何するものぞ。吾をして一日の生あらしめんか、其の一日即ち國民の迷を覺さざるべからず。」と。



基督は己を罪に陥るるものために神に祈りたり。嗚呼何ぞ其の慈悲の浩大にして無邊なるや。

四聖は其の生れたる處と時とを異にす。故に其の教理も亦多少の差違なきを得ず。今其の大要を擧ぐれば左の如し。

釋迦の教理は煩惱を斷滅して涅槃に達するを主旨とす。それ人生は苦に始まりて苦に終る。生老病死いづれか苦にあらざるべき。故に吾人は現世を苦界と觀ぜざるべからず。而して苦の原因は情慾にあり。情慾の原因は「我」の一念に執着するにあり。故に吾人は「我」の一念を脱却して無我無念の境界に達せざるべからず。是、人生究竟の樂地にして、涅槃即ち是なり。

孔子の教は、身を修め、家を齊へ、天下を治むるにあり。而して身を修むる基は孝にあり。故に孝は百行の本なり。君臣の義、父子

身を修め：  
大學所掲

の親夫婦の別長幼の序、朋友の信、皆之に基づく。人は生れながらにして美德を天に稟くれども、後天の氣質によりてこれを完うする能はざるもの多し。教育の要ここに於てかあり。既に教育を受けて身既に修まらば、家自ら齊ふべく、家齊はば、國自ら治まるべく、國治まらば天下自ら太平なるを得べし。故に孔子の教は一身の修養に始まりて、治國平天下に終るものと見るべし。

ソクラテスの教は所謂知徳合一説なり。謂へらく、眞正の知識は即ち道德なり。故に行ふと知るとはもと一體のみ。知つて行はざると、行うて知らざるとは、共に知識道德の眞正なるものにあらず。眞理を確信し、其の實行を以て最上の義務となせば、正義自ら其の中にあり。正義は靈魂の満足なり。而して靈魂は肉體と異にして不朽不滅なるものなり。故に吾人の正義を行ふや、現世

の利害は決して顧慮すべきにあらず。道德は富貴のために存せず、然れども富貴は道德の中に在り。」と。

基督の教は愛の教なりと稱せらる。所謂山上の垂訓は三年傳道の極意を包括するを以て、左に其の大略を擧げん。曰く、心の貧しき者は福なるかな、天國は其の人の有なればなり。悲しむ者は福なるかな、其の人は慰めらるべければなり。飢ゑ渴く如く義を慕ふ者は福なるかな、其の人は飽くことを得べければなり。心の清き者は福なるかな、其の人は神を見るべければなり。惡に敵するなかれ。人若し汝の右の頬を打たば左の頬をも轉らしてこれに向けよ。汝の隣人を慈しみて汝の敵を愛せよ。人に見せんが爲に義を其の前に行ふなかれ。汝等施をするとき、右の手に爲す所を左の手に知らしむるなかれ。隠れたるを鑒み給ふ神はあら

山上の垂訓  
猶太のシナ  
イ山の上で  
授けた教  
新約全書馬  
太傳にある

はに報い給ふべければなり。人は神と財とに兼ね事ふること能はず。人を是非するなかれ。人の目にある塵を見ながら、何ぞ己が目にある梁木を見ざる。汝等求めよ。然らば與へられん。尋ねよ。然らば遇はん。門を叩け。然らば啓かれん。窄き門より入れ。沈淪に至る路は濶く、其の門は大きく、これより入る者は多し。嗟呼、いかに生命に至る路は窄く、其の門は小さく、其の路を得る者の少きぞや。凡そこの訓を聽きて行ふ者は、磐の上に家建てたる智者の如く、聴けども行はざる者は沙上に屋を架せる愚人の如し。」と。基督教の精髓は後世の人如何なる色彩を加ふとも、實にこの山上の垂訓を基とせざるを得ず。

嗚呼四聖逝いて既に幾千年ぞ。而してその教の今なほ凛々として生氣あるを見よ。世界累代の幾億兆の民衆は、この教に憑り

て道念を養ひ、其の安慰を求む。四聖の如きは實に人類の永遠なる救済者なりと謂ふべし。其の遺徳の高大なること何を以て是に比せんや。(樗牛全集)

芳宜園

橋千蔭、江

戸の人、國

學者、歌人

文化五年

(二四六八)

歿

年七十五

村田春海

國學者

文化八年

(二四七一)

歿

年六十六

一四 芳宜園大人を祭る

村田春海

茲に文化の五年九月八日、平春海謹みて芳宜園の大人の奥津城の御前に菊の花一枝をたむけ、香の木一ひらを焚きて、うなねつきて申さく、あはれ悲しきかも、君は我に十といひて一年のこのかみにおはすなるが、今そのかみを思ひ出づるに、君は正に盛り年齢におはして、吾はまだ童にてぞ侍りける。常に縣居の庭に物學びに行きかひたる時、あしたにまゐるとしては君のみはかしのしりへに従ひ、ゆふべに罷るとしては君の御袖のもとにすがりて、相うるはし

千蔭  
とよしの  
あがたのみ  
つぎ事はて  
しづがふ  
せやの寄ぞ  
しづけき



千蔭 筆

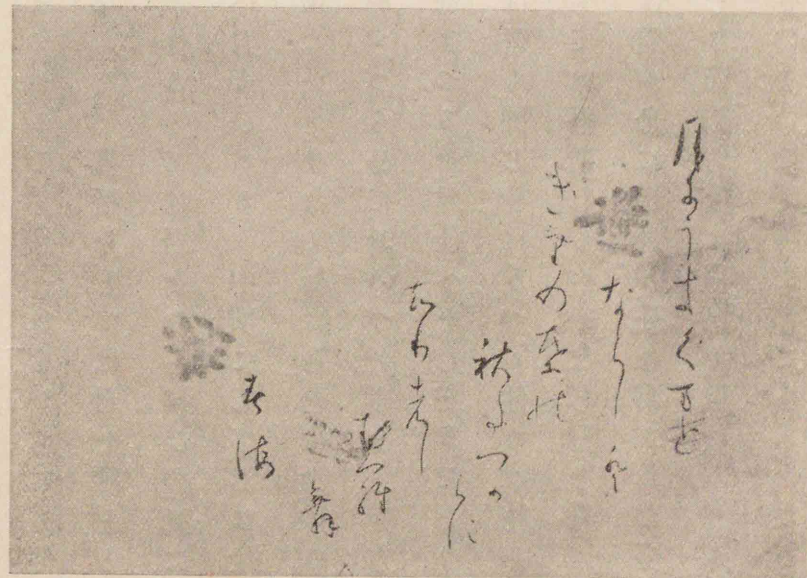
みまつれること、親子はらからにも何か異ならん。書讀むとては君を師とも尊み、歌作るとしては吾をおとゞひの列にぞ教へたまひける。中頃にして、君は仕への道にいとまなくおはし、吾は世のさがかゝづらひて、おのづからうとき方にも過ぎつるを、君仕へをしぞきたまひて後は、吾も同じ巷にうつり住めば、花を尋ぬとては、吾道しるべをなし、月を思ふとては君が舟に相乗り、憂き事も共に憂へ、嬉しき節もともに喜びて、世にありふるわざのまめごとも、あだごとも、かたみに

月にうきく  
まとならじ  
ときりの葉  
の秋たつか  
らにちりは  
じむらむ  
春海

へだてなく、心をかはせるこ  
と今に二十年、その初を繰返  
し數ふれば、相友たる事既に  
五十とせにぞ餘りける。さ  
るを今後れ奉りて、いつの世  
にか相見ん、何れの時にかこ  
ととはん。常なきは人の身  
の習ぞと知れど、これをいか  
で歎かざらん、かかるを誰か  
はよく堪へん。

あはれ悲しきかも。 文の

林世々に衰へ、言の葉の道日



春海筆蹟

くひぜを守  
り  
韓非子にあ  
る語  
舟にきだつ  
く  
呂氏春秋に  
ある語

日に下りゆけるを、賀茂の翁世に出でて、今をすてて古にかへり、青  
雲の高き心しらひを求め、倭文機の文あるみやびごとを貴みいへ  
れど、くひぜを守り、舟にきだつくる輩かれになづみ、こゝにひかれ  
て、尙怪しみがむる類多く、たまあひてよくうけひく人なん稀な  
りしを、君獨り心を起して、普く諭し、廣く誘ひしより、近き人は目の  
あたりあひうづなひ、遠き人ははるかに靡き來て、古ぶりの歌世に  
盛りになりたるなり。

その自ら詠みいで給へる歌を見るに、古き調新しき姿、とりく  
に備らざるはなし。その古を寫せるは藤原寧樂の御世に及び、後  
のたくみに倣へるは、堀河鳥羽の御時に下らず。心に思ふ事は口  
に盡さざることなく、目に觸るゝものは言葉に載せざることなん  
あらざりける。これを見て、たかきもみじかきも、めでたふとまざ

る人なし。又事好みの人はその名を君に知られては、身の面おこしと思ひて世にも誇り、君の一歌を得ては、價なき寶にもかへじといひてぞ深く喜びける。

然るを今、黄金の聲忽ち止みて、玉の響再び聞えずなりぬるは、わがどちの歎のみかは、大方の世の人の憂ともいひつべし。これをいかでか惜しまざらんか、るを誰かは慕はざらん。あはれ悲しきかも。わがかく言舉するを泉の下にもさやかに聞召し、天翔りても遙かに見そなはせとなん申す。(琴後集)

一五 隅田川

シテ	梅若丸の母	ワキ	渡守
ワキツレ	旅人	子方	梅若丸の幽霊
場所	武藏	季	春

次第 能の最初に登場した役者の獨唱を地謡で引取つて其の句を繰返して詠ふこと  
道行 過ぎ行く道の風景やこれに對する感想を叙べた處

ワキ詞 是は武藏の國隅田川の渡守にて候。今日は船を急ぎ人を渡さばやと存じ候。又此の在所にさる子細有つて。大念佛を申す事の候間。僧俗を嫌はず人數を集め候。其の由皆々心得候へ。ワキツレ次第 末も東の旅衣。末も東の旅衣日も遙々の心かな。詞 かのやうに候者は。都の者にて候。われ東に知る人の候程に。彼の者を尋ねて唯今まかり下り候。道行 雲霞。あと遠山に越えなして。あと遠山に越えなして。いく關々の道すがら。國々過ぎて行く程に。ここぞ名におふ隅田川。渡りに早く着きにけり渡りに早く着きにけり。

詞 急ぎ候程に。是ははや隅田河の渡りにて候。又あれを見れば船が出で候。急ぎ乗らばやと存じ候。如何に船頭殿船に乗らうずるにて候。ワキ詞 中々の事めされ候へ。先々御出で候跡の。

人の親の心  
 は闇に  
 後撰集に出  
 てある歌  
 結句「迷ひ  
 めるかな」と  
 ある  
 聞くや如何  
 に  
 新古今集に  
 出てる歌  
 結句「慣あ  
 りとば」と  
 ある  
 千里を行く  
 も親心  
 白氏文集の  
 語「親千里  
 行不<sub>レ</sub>忘<sub>レ</sub>  
 子」

けしからず物騒ぶつさうに候は何事にて候ぞ。ワキツレレさん候都より女  
 物狂の下り候が。是非もなく面白う狂ひ候を見候よ。ワキレさや  
 うに候はば。暫く船をとめて。彼の物狂を待たうずるにて候。  
 シテレ實にや人の親の心は闇にあらねども。子を思ふ道に迷ふと  
 は。今こそ思ひ白雪の。道行き人びとに言づてて。行方を何と尋ぬ  
 らん。聞くや如何に。上の空なる風だにも。地ち松まつに音する慣なま  
 あり。シテレ眞葛が原の露の世に。地ち身を恨みてや。明け暮れ  
 ん。シテレ是は都北白河に。年経て住める女なるが。思はざる外  
 に獨子ひとりごを。人商人に誘はれて。行方を聞けば逢坂の。關せきの東の  
 國遠き。東あづまとかやに下りぬと聞くより心亂れつゝ。そなたとば  
 かり。思子の。跡を尋ねて。迷ふなり。歌うた千里を行くも親心  
 子を忘れぬと聞く物を。もとよりも。契假ちぎなる一つ世の。契假

日も暮れぬ  
 舟に乗れ  
 伊勢物語業  
 平東下りの  
 條に「渡守  
 はや船に乗  
 れ日も暮れ  
 なんとといふ  
 に乗じて渡  
 らんとす」と  
 あるによ

なる一つ世の。其の中をだに添ひもせで。こゝやかしこに親と  
 子の。四鳥の別れ是なりや。尋ねる心の果やらん。武藏の國と。  
 下總の中にある隅田川にも着きにけり隅田川にも着きにけり。  
 シテレ詞ことばなうう我をも舟に乗せて給はり候へ。ワキレ詞ことばお事は  
 何くより何方へ下る人ぞ。シテレ是は都より人を尋ねて下る者に  
 て候。ワキレ都の人といひ狂人といひ。面白う狂うて見せ候へ。  
 狂はずば此の舟には乗せまじいぞとよ。シテレうたてやな隅田川  
 の渡守ならば。日も暮れぬ舟に乗れとこそ承るべけれ。かたの  
 如く都の者を。舟に乗るなと承るは。隅田川の渡守とも。覚え  
 ぬ事な宣ひそよ。ワキレ詞ことば實にまこと都の人とて名にし負ひたる優  
 しさよ。シテレなうう其の詞はこなたも耳にとままるものを。彼の  
 業平も此の渡りにて。名にしおはば。いざこと問はん都鳥。我

が思ふ人は。有りやなしやと。なう舟人。あれに白き鳥の見えたるは。都にては見馴れぬ鳥なり。あれをば何と申し候ぞ。ワキへあれこそ沖の鷗候よ。シテへうたてやな浦にては千鳥とも云へ鷗とも云へ。など此の隅田川にては白き鳥をば。都鳥とは答へ給はぬ。ワキへ實にへ誤り申したり。名所には住めども心なくて。都鳥とは答へ申さで。シテへ沖の鷗と夕波の。ワキへ昔にかへる業平も。シテへ有りやなしやとこと問ひしも。ワキへ都の人を思妻。シテへ妾も東に思子の。行方をとふは同じ心の。ワキへ妻をしのび。シテへ子を尋ぬる。ワキへ思ひは同じ。シテへ戀路なれば。地へ我も亦。いざこと問はん都鳥。いざこと問はん都鳥。我が思子は東路に。有りやなしやと問へども。問へども答へぬはうたて都鳥。鄙の鳥とやいひてまし。實にや舟なぎほふ。堀江の川

語  
過去の事を  
語りよかせ  
る詞のこ  
る

のみなぎはに。來居つゝ鳴くは都鳥。それは難波江これは又。隅田川の東迄。思へば限りなく。遠くも來ぬる物かな。さりとは渡守舟。こぞりて狭くとも。乗せさせ給へ渡守さりとては乗せてたび給へ。ワキへ詞へかゝるやさしき狂女こそ候はね。急いで舟に乗り候へ。此の渡りは大事の渡りにて候。かまひて靜かに召され候へ。ワキへ詞へなうあの向ひの柳の本に。人の多く集りて候は何事にて候ぞ。ワキへ詞へさん候あれは大念佛にて候。それにつきてあはれなる物語の候。此の舟の向ひへ着き候はん程に語つて聞かせ申さうずるにて候。

語へさても去年三月十五日。しかも今日に相當りて候。人商人の都より。年の程十二三ばかりなる幼き者を買ひとつて奥へ下り候が。此の幼き者。いまだ習はぬ旅の疲れにや。以ての外に

違例し。今は一足も引かれずとて。此の河岸にひれふし候を。  
 なんぼう世には情なき者の候ぞ。此の幼き者をば其の儘路次に  
 捨てて。商人は奥へ下つて候。さる間此の邊の人々。此の幼き  
 者の姿を見候に。よし有りげに見え候程に。さまざまに痛はり  
 て候へども。前世の事にててもや候ひけん。たんだ弱りに弱り。  
 既に末期と見えし時。お事はいづく如何なる人ぞと。父の名字  
 をも國をも尋ねて候へば。我は都北白河に。吉田の何某と申し  
 し人の唯ひとり子にて候が。父には後れ母ばかりに添ひ参らせ  
 候ひしを。人商人にかどはされて。かやうになり行き候。都の  
 人の足手影もなつかしう候へば。此の道の邊りにつき籠めて。  
 しるしに柳を植ゑて給はれとおとなしやかに申し。念佛四五返  
 稱へ遂に事終つて候。なんぼうあはれなる物語にて候ふぞ。見

申せば船中にも少々都の人も御座ありげに候。逆縁ながら念佛  
 を御申し候ひて御弔ひ候へ。よしなき長物語に舟が着いて候。  
 とうとう御上り候へ。ワキツレ詞如何さま今日は此の所に逗留仕  
 り候ひて。逆縁ながら念佛申さうずるにて候。ワキ如何に是な  
 る狂女。何とて舟よりは下りぬぞ急いであがり候へ。あらやさ  
 しや。今の物語を聞き候ひて落涙し候よ。なう急いで舟より上  
 り候へ。シテなう舟人。今の物語はいつの事にて候ぞ。ワキ去  
 年三月今日の事にて候。シテさて其の兒の年は。ワキ十二歳。  
 シテ主の名は。ワキ梅若丸。シテ父の名字は。ワキ吉田の某。  
 シテさて其の後は親とても尋ねず。ワキ親類とても尋ねこず。  
 シテまして母とても尋ねぬやなう。ワキ思ひもよらぬ事。シテな  
 う親類とても。親とても尋ねぬこそ理なれ。其の幼き者こそ。





此の物狂が尋ぬる子にては  
候へとよ。なう是は夢かや  
あらあさましや候。ワキ詞  
〽言語道断の事にて候もの  
かな。今まではよその事と  
こそ存じて候へ。さては御  
身の子にて候ひけるぞやあ  
川ら痛はしや候。かの人の墓  
所を見せ申し候べし。こな  
たへ御出で候へ。  
シテ〽今まではさりとも逢  
はん頼みにこそ。知らぬ東

帝木の見え  
つ隠れつ  
新古今集十  
一、坂上是  
則「その原  
や伏屋にお  
ふる帝木の  
ありとはみ  
えてあはぬ  
君かな」

に下りたるに。今は此の世になき跡の。しるしばかりを見る事  
よ。さても無慙や死の縁とて。生所しうじよを去つて東のはての。道の  
邊まぎの土となりて。春の草のみ生ひ茂りたる。此の下にこそ有る  
らめや。地ち〽さりとは人々此の土を。かへして今一度。此の  
世の姿を。母に見せさせ給へや。歌〽残りても。かひ有るべき  
は空しくて。かひ有るべきは空しくて。有るはかひなき帝木の。  
見えつ隠れつ面影の。定めなき世の習。人間うれひの花盛。無  
常の嵐音添ひ。生死長夜の月の影不定の。雲おほへり實に目の  
前の憂世かな實に目の前の憂世かな。  
ワキ詞〽今は何と御歎き候ひてもかひなき事。ただ念佛を御申  
し候ひて。後世を御弔ひ候へ。既に月出で河風も。はや更け過  
ぐる夜念佛の。時節なればと面々に。鉦鼓しやうこを鳴らし勸むれば。

シテ母は餘りの悲しさに。念佛をさへ申さずして。唯ひれふして泣き居たり。ワキウたてやな餘の人多くましますとも。母の弔ひ給はんをこそ。亡者も喜び給ふべけれど。鉦鼓を母に參らすれば。シテ我が子の爲と聞けば實に。此の身も梟鐘を取り上げて。ワキ歎きをとゞめ聲澄むや。シテ月の夜念佛もろともに。ワキ心は西へと一筋に。シテワキ二人南無や西方極樂世界。三十六萬億。同號同名阿彌陀佛。地南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。シテ隅田河原の。波風も聲立て添へて。地南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛。シテ名にしおはば。都鳥も音をそへて。地子方南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。

シテ詞なうく今の念佛の内。正しく我が子の聲の聞え候。

此の塚の内にて有りげに候よ。ワキ詞我等もさやうに聞きて候。所詮此方の念佛をば止め候ふべし。母御一人御申し候へ。

シテ今一聲こそ聞かまほしけれ。南無阿彌陀佛。子南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛と。地聲の内より。幻に見えければ。シテあれは我が子か。子母にてましますかと。地互に手に手を取りかはせば又。消え消えとなり行けば。いよいよ思ひはます鏡面影も幻も。見えつ隠れつする程に東雲の空も。ほのぼのと明け行けば跡絶えて。我が子と見えしは塚の上の。草茫々として唯。しるしばかりの淺茅が原となるこそ哀れなりけれ。なるこそ哀れなりけれ。

一六 武 惡

アド  
シテの相手  
となるもの

シテ 武悪

アド 大名 太郎冠者

大名「罷出でたるは、隠れもない大名。左様にござれば、某使ふ下人に、無奉公を仕居る奴がござる。太郎冠者を喚び出し、縛捕りに遣らうと存ずる。あるかやい。」

冠者「はつ、御前に。」

大名「念なう早かつた。汝を喚び出す餘の儀でない。武悪めを、汝急いで縛捕つて参れ。」

冠者「あゝ、さりながら、あれも御館では覺の者でござれば、え縛捕りますまい。」

大名「まこと、え縛捕らずば、首を打つて來い。」

冠者「畏つてござる。さりながら、身どもが指刀は覺がござらぬ。」

御前の御太刀を貸さつしやれませう。」

大名「おう、これやゝ急いで、打損はぬやうに、撃つて参れ。」

冠者「畏つてござる。扱てもゝ迷惑なことを言ひ付けられたことかな。まづ参らずばなるまいが、程なうこれでござる。ものも。お案内。」

武悪「やら奇特や。聞いたやうな聲ぢやが、案内は誰ぞ。いや、太郎冠者か。」

冠者「なかゝ。内でござるか。」

武悪「やい、太郎冠者、殿の不興を蒙り、汝が來たとても心は縦さぬ。」  
冠者「はてさて、ひよんなことをおしやる。皆御朋輩衆よらつしやれて、武悪といふ者は、家久しう覺の者をば、斯様にして置かつしやるのは、殿の違ひぢやとあつて、皆おつしやるのには御前

を直さうとおつしやるほどに、其方は急いで川狩に出やつて、  
雑魚を捕つて、御前へ持つて出やつたらようおぢやろ。又殿  
も、今日は川狩に出らるゝ。そこで、御朋輩衆が申し直さうと  
おつしやるほどに、急いで出やす。」

武悪「はれさて、嬉しや。その儀なれば行かうほどに、さあゝ其方  
も来てくりやれ。」

冠者「心得ておぢやろ。」

武悪「あゝ、好い洲を見付けておぢやろ。いかいことの雑魚でおぢ  
やる。なうゝ失念したことがおぢやろ。餘り嬉しいまか  
せに、網をも持たずに、ひよいと出たわいの。」

冠者「なうゝ何としたものでおぢやろ。」

武悪「あゝ、身が草寄せといふことを知つておぢやるほどに、さあさ

草寄  
押草ともい  
ふ魚を隅へ  
追寄せて手  
と捕にするこ

あ、其の方から逐うてくれさしめ。」

冠者「心得ておぢやろ。」

武悪「身はこれからおして行くぞ。」

(太郎冠者太刀を抜き振りかざしていふ。)

冠者「殿の仰ぢや。覺悟せい。」

武悪「やい、太郎冠者、汝がいふ事まことと思つて、ひよつと出たれば、  
まことに鳥の目を縫うて放したやうなことをして、曲もない  
ものぢや。宿でも、かうというてくれるならば、妻子供に、言ひ  
置きたいこともあるのに、曲もないものぢや。是非に叶はぬ。  
急いで打たせませ。」

冠者「其方が歎きやるのをば思つては、今日は人の身の上、明日はわ  
が身の上、世の中に、宮仕などをせうものではない。」

武悪「ものを思はずとも、早う打つてくれいやい。」  
冠者「いや、討たうとは思うたれども、何として身が討たれうぞ。」

(三人ともに泣く)

冠者「急いで落ちさせませ。」

武悪「否々、物思はずとも、早う討つてくれさしめ。」

冠者「命が物種ぢや。急いで落ちさせませ。」

武悪「それはして、まことでおぢやるか。」

冠者「なか〜。」

武悪「したら、後の儀を頼む。」



武悪用の假面

冠者「片時も急いで落ちさしませ。」

武悪「やれ扱て、鰐の口を遁れた。最早今が都の名残でおぢやるほどに、清水へ暇乞に参りませう。」

(中 入)

冠者「まづ、急いで殿の前へ参らうぞ。殿様ござりまするか。」

大名「やい〜、何とした。討つて来たか。」

冠者「なか〜、討ちましてござります。」

大名「して何として討つたぞ。」

冠者「その御事でござります。彼奴は手者と思はつしやれませい。又身どもは、何にも存ぜぬ者のこととござれば、騙さずばなるまいと存じ、『朋輩衆のおつしやる、殿の御前へ、言ひ直さうほどに、殿も川狩に出さつしやるほどに、其方も急いでお出

やつたらよからう』と、申してござれば『それを序に、言ひ直してくれうと、おつしやることか。』とて、嬉しがつて、なにが川へでまして、深い所で草寄せをいたします處をば、身どもがこのお太刀でもつて、何がござらうぞ。水もたまらず、ぶちはなしてござる。扱てもく、よう切れる御太刀でござる。」

大名「よう切れたか。」

冠者「なか／＼、よう切れましてござる。」

大名「でかいた／＼。やい、して、別に何もいひはせなんだか。」

冠者「そこで申しますのには、やい太郎冠者、常に等閑なうして、かひもない。妻子供にも見せて、内では討つてくれいで、曲もないものぢやと申して、いかう恨みましてござる。扱てもく、奉公といふものは、物憂いものでござりまする。すこしの違が

ござると、あれでござる所で。」

大名「やい、まことに汝がいひつる如く、思へば家久しい者をば、むざと討つて捨てたことぢや。」

冠者「殿様も、左様に思はつしやれまするか。」

大名「汝が泣くので、我も討つまいものとは思へども、最早討つた者は、戻るまいほどに、身も涙を止めるぞ。汝も泣き罷め。やい、かうしてゐたらば、面白いこともないほどに、いざ來い。物忘に、清水へ參ろ。汝も供に來い。」

冠者「畏つてござる。」

大名「はて扱て、思へば惜しいことをしたわいやい。」

冠者「御意の通りでござりまする。」

大名「やい太郎冠者、あの向から來るは、武悪ではないか。急いで見

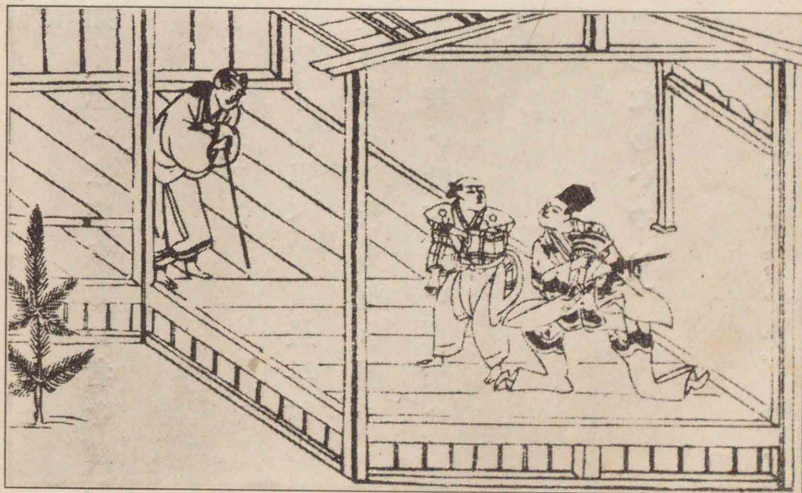
六道  
六道の辻  
清水観音へ  
の途にかう  
呼ぶ處があ  
る

て参れ。」

冠者「あゝ、此處は六道でござりま  
する處で、迷うてがなゐるも  
のでござろ。急いで見て参  
りませう。やいゝ、今殿の  
見付けられたが、急いで落ち  
はせいで。」

武悪「己もさて、一期の名残ぢやと  
思うて、清水へ参つて見つけ  
られた。天の網が着さつた。  
覺悟した。」

冠者「なうゝ、急いで様を變へて



武 悪

出さしませ。幽靈のやうにして。」

武悪「なかゝ、心得ておぢやる。」

(中 入)

冠者「申し殿様でござりまするか。今のは武悪がやうにござりま  
したが、追つ懸けて参ると見失ひましてござる。」

大名「やいゝ、冠者、あれやゝゝ、又出居つたわ。」

冠者「扱ては、も、幽靈に紛まがはござりませぬ。」

(白小袖を着て、白小袖を打被け、つぼをつて、杖をつき、捌き髪、額に紙を  
當てて出る。)

武悪「娑婆にも行かず、冥土にも六道の衢にまよふ。」

冠者「あゝ、申しゝゝ、武悪が亡靈には、隠れもござりませぬ。」

武悪「申しゝゝ。」

冠者「あれ、武悪が呼びまする。」

大名「いて何といふぞ、聞いて来い。」

冠者「いや、行て殿様聞かつしやれませい。」

大名「汝行て聞いて来い。」

武悪「申し、祖父御様からお使に参りましたのに、よい處で御目に懸りました。朝夕閻魔様へ、出仕をなされますのに、御太刀がなうて、迷惑なされます。身どもに参つて取つて来いとおつしやれましたほどに、いくさつしやれませい。」

大名「やい、館でならば、熨斗つけを進上ずれども、道で逢うた儀でござるによつて、佩荒したれども、これを進ずると申してくれい。」

武悪「左様には申しませう。素襖袴扇までを、よこさつしやれませ

いとおつしやれました。」

大名「おう、心得た、やい、太郎冠者、脱がしてくれい。皺がよりましたれども、召さつしやれてくだされいと申し、これを持つて行け。」

冠者「これや武悪、取つて行け。」

武悪「なう、冠者殿、取るものは取りましたが、殿の直に御目に掛つて申せと、おつしやれたことがござる。」

冠者「まうし、殿様、武悪が直に申したいと申しまする。」

大名「やあ、何としたことぢやな。」

武悪「まうし殿様。」

大名「何でござるぞ。」

武悪「祖父御様のおつしやれまするのは、狭い娑婆にござりませう



よりも、廣い所へお供して來いと、おつしやれましたほどに、どうござろと、いてござりませう。お供して參ろ。」

大名「やい、武悪、祖父御様に、狹うても此處がようござる。ずつとこんど參らうと申してくれい。」

武悪「どうござつても、身どもがかう申すからは、手を引いてなりとも、連れまして參らねばなりません。」

冠者「まうし殿様、あの態ならば、武悪めが手を引いて參ろほどに、まづ、急いで逃げさつしやれませう。」

大名「やい、それよ、冠者も逃げい。」

冠者「まうし、さればこそ殿様は逃げられた。武悪、よい調戲でなかつたか。」

武悪「されば、其方の蔭で嬉しうおぢやる。思もよらぬ路錢ま

でを貰うた。」

冠者「急いで落ちさせませ。」

武悪「心得ておぢやる。後を頼む。さらば。」

一七 自主的精神の要求

深作 安文

元來外來思想に對する批判的態度は、我々日本國民に取つては傳統的のものである。古來我が國には三種の思想が輸入せられた。其の一は儒教を中心とする支那思想、其の二は佛教を中心とする印度思想、其の三は基督教を中心とする歐米思想である。今次のデモクラシーは正に第四回の外來思想である。我等の祖先は、是等の外來思想をば無批判的に盲目的にこれを採用することをしてしないで、常に批判的態度を取り、其の取るべきは取り、捨つべき

深作安文  
文學博士  
東京帝國大  
學教授

Democrat  
デモクラシー  
民本主義

は捨てたのである。

支那の家族制度を背景として成立つた儒教は、大體道德の點からも、また政治の點からも、同じく家族制度を根柢とする吾の道德、吾の政治とさまで乖離するところが無かつた。けれども、茲に著しい一の例外がある。夫は禪讓放伐である。これは支那に於ける君位繼承法であつた。天子が有徳者に其の位を讓るを禪讓といひ、力ある者が當今の天子を或は放ち或は伐つて、己れ取つて代るを放伐といふのである。支那の國家に斷えず易姓革命のあつたのはこれが爲である。言ふ迄もなく此の方法は我が國體と全然相容れないもので、我が祖先是斷じて之を取らなかつた。特に當年の天下に率先して名義論を高唱した水戸藩の如きは、青年學徒をして孟子を讀むことを禁じた程である。孟軻氏は敢へて明

らかに放伐を是認した者であるからである。

佛教に對しても亦然りである。佛教が如何に我が祖先の信仰はいふ迄もなく其の思想の深みを増し、其の道德の實行力を強めたかといふことは改めて言ふを須ひぬ。例へば彼の三世因果説の如き、何たる巧妙な又有效な考へ方であつたらうか。けれども該教には我が國民性と到底相容れぬ思想がある。それは死々滅滅の厭世觀である。灰身滅智の悲觀説である。もと大和民族は陽氣な積極的な民族である。爲に佛教の厭世觀は採用しなかつた。却つて佛教が我が國に輸入せられ、幾多の年所を経る間に、それがいつしか日本化して、餘程積極的な、餘程國家的な宗教と變つた。殊に日蓮宗の如き、淨土宗の如き、新に我が國で生れた宗派は國家的色彩が極めて鮮明である。「隱岐の法皇は天子なり。權の

隱岐の法皇  
後鳥羽法皇

大夫殿は民ぞかし。」と義時を罵つた日蓮の意氣は天を衝くばかりである。又眞宗は「王法爲本、仁義爲先。」と教へるのである。

基督教に對しても亦同じ事が言はれる。基督教は或點に於ては佛教に優り、儒教より秀でてゐる。其の如何にも深刻なところ、大膽なところ、清新なところ即ちこれである。けれども基督教には我が國民思想とどうしても一致せぬ點がある。それは該教の世界主義である。基督教は個人より直ちに躍つて世界人類に往くのである。特に國家主義的思想を愛し、永く皇室中心の國民生活をなし來つた日本民族は、此の點に於て基督教を好まぬのである。我が國に於て基督教に對して諸種の非難が今尙其の聲を潜めぬのはこれが爲である。是故に若し今後基督教が我が同胞の信仰生活の奥底まで立入ることを期するならば、恰も佛教界に傳

傳教

名は最澄  
嵯峨天皇  
弘仁十三年  
(一四八二)  
寂  
年五十六  
弘法  
名は空海  
仁明天皇  
承和二年  
(一四九五)  
寂  
年六十二

教弘法などの偉傑が現れて、巧に佛教を日本化させたやうに、思ひ切つて基督教を日本化させることを先決の要件とする。

斯様な次第で、我が先祖は諸の外來思想に對して、常に一かどの見識の下に批判的態度を取つたといふことは、安んじてこれを言ひ得るのである。今日吾々はデモクラシーに對しても亦此の傳統的態度を失ひたくない。人或は言ふ、デモクラシーは世界の思想上の大勢である、どうして之を人爲人力を以て堰止めることが出來ようぞと。固より然りである。けれども如何に世界の一大勢なればとて、無批判的に盲目的に之に對するといふことは、上述の傳統的精神の許さぬところである。自主的精神の首肯せぬところである。吾々日本民族は今後力めて思想的に獨立の地歩を占めることを圖らねばならない。(外來思想批判)

坪内逍遙  
名は雄藏  
文學博士

長柄隄

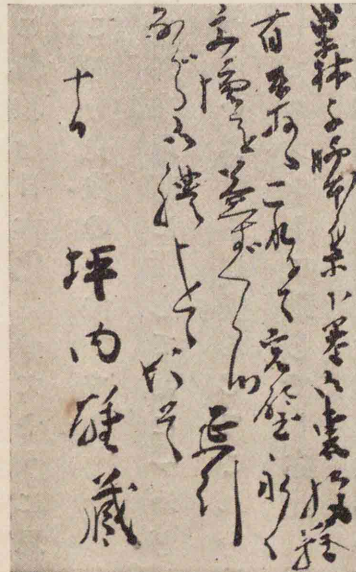
攝津國西成  
郡豊崎村を  
流る、長柄  
川の隄

片桐且元  
秀吉の臣  
攝津茨木城  
主

一八 長柄隄の訣別

坪内逍遙

晨雞再び啼いて残月薄く、征馬しきりに嘶いて行人出づ。はや分  
れゆく横雲や、残の星を一つづつ鐘が消しゆくいなめの、長柄隄に  
秋たけて、一むら蘆に風黒く、ありあけ凄き淀川水、ゆきて歸らぬ浪の  
音、狭霧に咽び白けゆく、千草が蔭の蟲の聲、哀れはいとどまさるらむ。  
片桐市正且元は、居城茨木へ立退かむと、從ふ郎黨一百餘人、深更に邸  
を立つて、大阪城をあと  
になし、列を正してしづ  
しづと、長柄隄にさしか  
かる。(中略)  
後には何か一思案、寂然  
として駒たつる長柄隄



坪内逍遙筆蹟

の有明がた、時に囀る小鳥の聲、川霧やうく、霧行けば、遠樹模糊とし  
て幹を分ち、ほの見えわたる賤が屋に、一筋のぼる朝煙、くだかけの聲  
勇しく、生氣溢る、東の空には似ぬや入りかたの月、すさまじき柳蔭、  
枯葉枝まばらにして、風飄々、見る目も昏し、遠方におぼろくとあら  
はる、名に大阪の四衢八街、悄然としてさびしげに、一棟高く聳えし  
は、

市「お、あれこそはお天守ぢやなあ。 南山不落と祝はせられ、千萬  
年の後までもと、築かせられし大阪城、故殿下かくれさせ給ひて  
後、まだ程もなきに礎搖ぎ、諸大名の心は離ればなれ、取分け加藤  
肥州逝去の後、思慮ある者には、堅節なく、義勇を存ずる者才略  
乏しく、阿附黨同して相闘げば、大政所の御方さへ、當家を餘處に  
見そなはし、浮世はなれし御ありさま。 唇齒已に亡ぶ。 今にも

南山不落

如二月之恆、

如三日之昇、

如南山之壽、

不驚不崩

(詩經)

故殿下

豊臣秀吉

大政所

秀吉の正妻

あれ事起らば、金城湯池もその甲斐なく……」

いひかけて聲くもらせ、

市「須彌より重き御遺命夢いさゝかも忘れざれど、御運の末か情なや。この且元がすること、爲すこと、いすかの嘴とくひちがひ、兩家を繋ぐ絆にもと、迎へ奉りし千姫君は、東西不和の導火となり、毘盧舍那佛の御胸にも、大慈大悲は宿らざるか、お家とこしなへに康かれと、祝ひし文字が元となり、降つて湧いたる難題は、只前門の虎にして、後に不慮の豺狼あり。かゝる仕宜となつたると、御運の末とはいひながら……」

こらへず馬より飛下り、かなたに向ひ平伏なし、

市「これしかしながら不肖且元、愚昧にして先見無く、姑息因循して大事を誤り、空しく關東の良にかゝり、仰せつけられし御遺命に、

千姫  
秀忠の長女  
慶長八年七  
月秀頼に嫁  
す

背き奉るけふの仕合せ、不忠ともいふ甲斐なしとも思し召さむ。それを思へば且元がこの腸はちぎるゝばかり。償ひがたき不臣の罪は、あの世で御わび仕らむ。お許しなされて下さりませ。」  
在すが如く兩手をつき、人目なければ稍しばし、不覺の涙に暮れにけるが、やゝあつて心付き、

市「あゝ、我ながら不覺の至。わが大罪の御詫よりもさしかゝるお家の安危。長門守には如何にせし、心許なき事どもぢやなあ。」

すかしながむる折こそあれ、遙かに聞ゆる蹄の音。程もあらせす只一騎、残霧つんざき一散に、汗馬に宙を走り來る、木村長門守重成。

木「市正殿に候な。」

市「長門殿、待ちかねしぞ。」

いふ間にか、け寄るくつわづら、右手におりたち顔見あはせ、言葉はな

くてそとろにも、まづ袖ぬるゝ朝霧や、風飄々たる枯柳の枝入りかたの月ゆらめきて、老いゆく秋のさびしさを、長柄隄にとむらむ。

木「もはや豊臣の御社稷も、いよゝ末となつたるか。棟梁と頼む足下まで、佞人讒者の毒舌に、逆臣の汚名を受け、空しく退身せらるゝとは。それがし圖らぬ事よりして、端なくも御母公の御嫌疑蒙り、出仕を遠慮のその間に、思ひがけぬ珍變あり。つゞいて足下に御討手と、昨朝承り、大いに驚き、すぐにお表へ参入すれば、城内議論沸くが如く、織田入道殿日ごろに似氣なく、激論の末、席を蹴たて、只今退座ありしとばかり。後は亂脈無法の評定。御母公の威を笠に被る、大野渡邊等が我意暴慢。この上は是非に及ばず、かれ等を一刀に斬つてすて、腹かき切らむと二度まで刀の柄に手はかけしが、貴殿が日ごろの教訓を、思ひ出して無念を

御母公  
秀頼の生母  
淀君

織田入道  
織田常真入  
道

大野・渡邊  
大野治長  
渡邊尙

忍び、無實と知つて忠臣を、救ひ得ざりしいふ甲斐なさ。」

悔むを且元おしなだめ、

市「いしくも堪忍せられしぞや。かねても屢、申しごとく、お家の大仇は彼等にあらず。鼠輩の爲に命を落すは、大忠臣の所爲にあらじ。某とてもこの度の一條、遺恨骨髓に徹すと雖も、今更繰返すは愚癡の至。大切なるはお家の後事。それがし退去のこゝと關東に聞えなば、破綻生ぜむ事治定なるに、きのふまでは去就を定めざりし、織田殿の己に心を變じ、京表へ退身せられしからは、城内の祕密悉く漏れ、年來の苦心皆うたかた。大亂破裂せむは目前なり。この上は只ひとへに、籠城の計畫こそ肝要なれ。」  
木「して籠城の計畫とは、何を以て先とすべきか。」  
市「されば、今御城に兵糧金銀は乏しからず。まつた猛將勇卒にも

事か、ねど、得難きは智謀の將なり。それがしこれを慮り、萬一の備をなし置きたり。」

九度山  
紀伊國伊都  
郡高野山の  
北谷にある



村こそ、故大閣の恩を思ふ、智勇兼備の良軍師。關が原の一戰以來、關東の跋扈を怒り、蟄して世の態を窺ひ居るを、先年お身方に

木「してその智

謀の將とは。」

長 市「今九度山に

隠れ忍ぶ、信

州上田、前の

城主、眞田安

房守が二男

左衛門佐幸

別 訣 の 隄 柄 長

なし置いたり。事起らば上使を以て、急ぎ彼を招かるべし。合戦の進退は一切かの人に任せられよ。その他、關が原の一亂以後、浪々なせし長曾我部盛親、まつた黒田家の浪人、後藤又兵衛、基次、何れも得易からぬ良將なるが、かねてちなみはつけ置きたり。御上使を以て招かせられなば、心を傾け馳せ參ぜむ。これ第一の手配りなり。」

木「して又籠城となつたる曉、敵を防がむ手配りは。」

市「その儀もかねて地利を考へ、出丸なくては叶ふまじと、前年、紀州の山々より、材木あまた切りいださせ、商業の爲と偽り、紀國川の川上より、浪速津に押流させ、御船入に積置いたり。まつた港口の御庫には、年ごろ力めて購ひ置きたる、數萬俵の糧米あり。籠城數年に互るとも、なほ支ふるに餘りあるべし。」

木「それに加へて故殿下が貯へおかれし數萬の金銀、近年御出費か  
さむと雖も、なほ若干の餘財あり。」

市「甲冑兵具も乏しからず。」

木「城は名に負ふ南山不落。」

市「眞田後藤の智勇をもて、この堅城にたて籠り、忠臣悉く心を一に  
し、ひとへに君家を守護するときんば、」

木「たとひ關東の老奸雄、利をくらはせ諸大名をなづけ、六十餘州の  
兵を盡し、四方八方より攻寄すとも、」

市「なか／＼三年四年がほどには、攻落さむこと難かるべし。」

木「まつた若年には候へども、いよ／＼軍はじまりなば、われまた一  
方をうけたまはり、速水御宿和久等と共に、忠義を金鐵の堅きに  
比し、命はもとより鴻毛の、吹翻さむ白旗は、祖先佐々木が四つ目

關東の……  
徳川家康

速水・御宿  
和久  
速水守久  
御宿正倫  
和久宗是

結、君臣將士心を一にし、千變萬化の手を盡さば、金石も亦徹りぬ  
べし。利慾に集まる關東勢、なに退くるに難かるべきや。この  
上は仰に従ひ、このこと君に言上なし、直ちに軍の手配りせむ。  
御心安かれ市正殿。」

市「ほ、頼もし、頼もし。大切なるは上下の一致、必ず忠勤勵まれよ。  
ことはいひながら往時に照し、成行く末を鑑みれば。」

木「淀の御方の御氣質、社鼠にひとしき大野渡邊。」

市「上、御發明にわたらせらるれど、」

木「讒佞これを蔽ふがゆゑ、」

市「地の利はあれども人の和なく、」

木「故太閤が御威武にをのき震ひ打伏せし、六十餘州の民草も、  
市「天の時にや大御所のおのづからなる徳風に、いつしか靡く世の



有様。」

木「如何なればかくまでに、御運傾く西天の、」

市「有明の影うすれつゝ、」

木「東天紅と八面に、かしましく啼くくだけかけは、」

市「新日東天に昇るといふ、」

木「世の成行の、」

二人「影なるか。」

是非もなき世の有様と、入るかたの月詠め入り、しばしは愚癡にをち  
かた寺、耳驚かす鐘の聲夜はほのくくと明けにけり。(桐一葉)

### 昭和國文讀本 中學校用 卷九 終

昭和三年八月廿六日印刷  
昭和三年九月一日發行  
昭和四年一月五日訂正再版印刷  
昭和四年一月八日訂正再版發行

定價金參拾九錢

昭和四年度臨時  
定價金六拾五錢

不許	複製
----	----

昭和國文讀本 卷九

著者 高野辰之

發行者 大葉久吉

印刷者 堀江關武

東京市日本橋區本銀町三丁目十四番地

東京市小石川區諏訪町五十六番地

常磐印刷所印刷

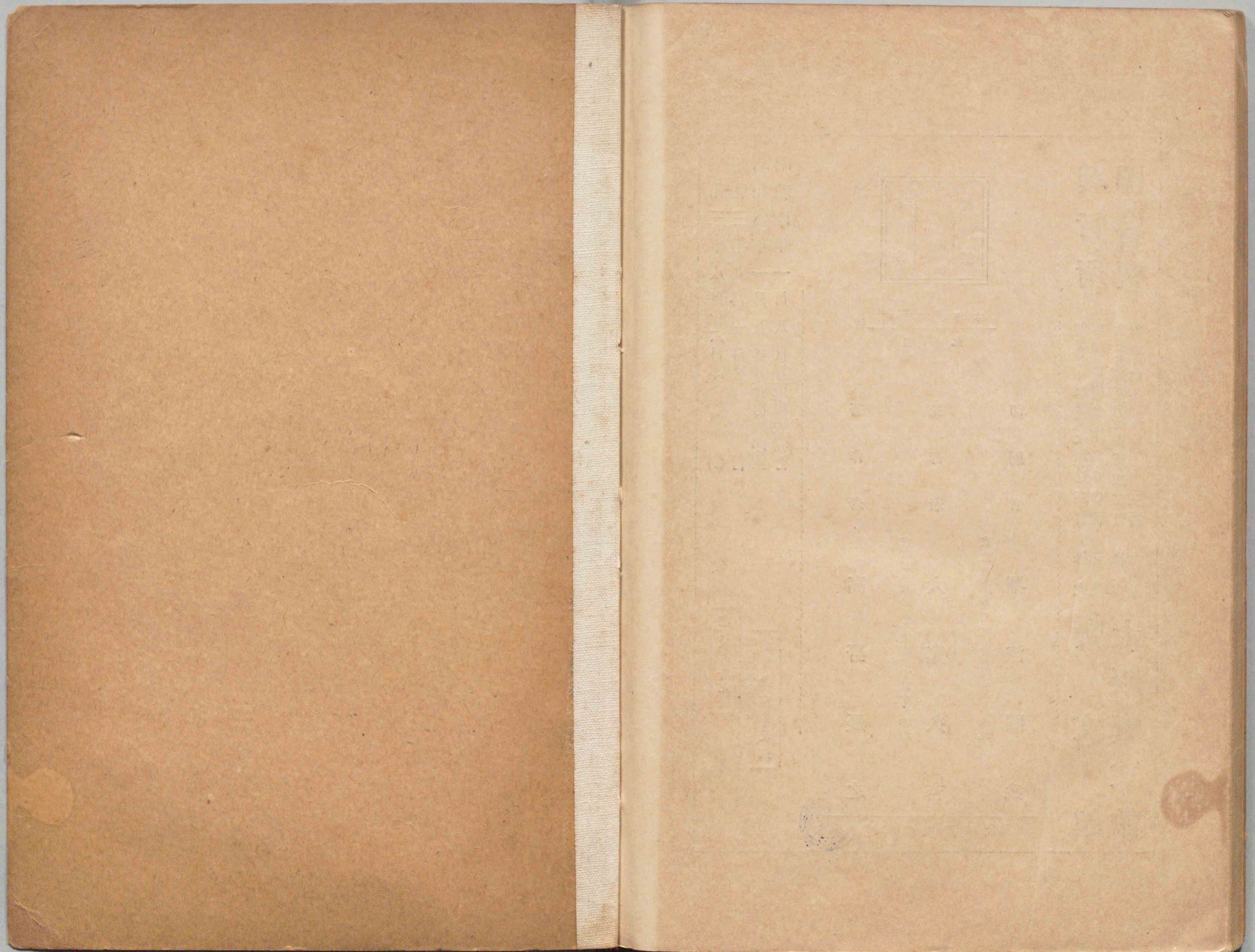


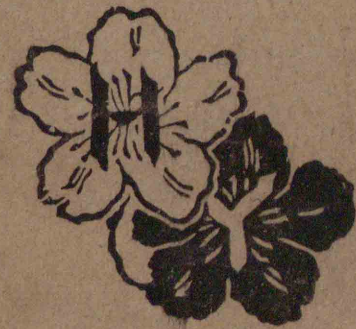
### 發行所 關西專賣

東京市日本橋區本銀町三丁目  
振替口座東京二八〇番  
大阪市西區阿波堀通四丁目  
振替口座大阪四三番

株式會社  
株式會社

寶文館  
大阪寶文館





蔵

29

032

広島大学図書

2000044032

